

新発田城跡 発掘調査報告書 VII

(第22地点)

2010

新発田市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、新潟県新発田市大手町6丁目4番16号ほかに所在する新発田城跡第22地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、陸上自衛隊新発田駐屯地内の施設建設工事に伴うものである。防衛省北関東防衛局の委託を受け、新発田市教育委員会が主体となって、平成20年6月5日から7月31日に現地調査を、発掘調査終了後から平成22年3月まで整理作業を実施し報告書を作成した。
3. 現地の発掘調査から報告書刊行に至るまでの経費は、開発の原因者である北関東防衛局が全額を負担した。
4. 報告書作成作業は、津田憲司を中心に実施し、これを整理作業員が補助した。なお、磁器の実測・トレースについては、(株)太陽測地社に業務委託した。
5. 本書の執筆は、「第1章2調査に至る経緯と調査体制」を鶴巻康志が、それ以外の執筆と編集は津田が行った。
6. 本書掲載の写真は、遺構を鶴巻・津田が、遺物を津田が撮影した。
7. 調査の記録および出土遺物は、新発田市教育委員会が保管している。遺物の注記は、遺跡名を「SJ22」と略記し、以下「出土グリッド・遺構・層位・遺物番号・日付」を記した。
8. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の諸氏・機関から多くのご協力・ご支援を賜った。記して感謝の意を表する。(五十音順 敬称略)

阿部朝衛 阿部洋輔 安藤正美 磯辺保衛 伊藤喜代子 伊藤啓雄 小田由美子 小林 弘 鈴木秋彦
関 雅之 高橋春栄 増子正三 水澤幸一 宮田進一 四柳嘉章 渡辺ますみ 防衛省北関東防衛局
陸上自衛隊新発田駐屯地

凡 例

1. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行1/50,000「新発田」を縮小したものである。
2. 本書に掲載した平面図の方位は、第1・2図は天を真北とし、それ以外は方位記号の方向を磁北とする。
3. 挿図の縮尺は各図版にスケールで示した。主な縮尺は、遺構1/60、1/40、遺物1/3である。
4. 遺構実測図の「K」は、攪乱を示す。
5. 土層説明での土色は、『新版 標準土色帖』（小山・竹原1967）を使用した。
6. 遺物実測図は、一点破線が陶磁器の施釉範囲、実線がヘラケズリ、スクリーントーン  が漆の付着範囲を示している。
7. 遺物観察表の数値は、() が復元値、< > が残存値を表し、計測不能なものは空欄とした。
8. 引用・参考文献は、巻末に一括し、本文中では著者名と発行年を括弧書きとした。

本文目次

例言・凡例

本文目次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過 1

- 1 遺跡の位置と立地 1
- 2 調査に至る経緯と調査体制 2
- 3 調査の方法と経過 4

第Ⅱ章 遺構と遺物 6

- 1 調査区Ⅰ－Ⅳ層 6
- 2 調査区Ⅰ－Ⅴ層 16
- 3 調査区Ⅱ 24
- 4 遺構外・攪乱出土遺物 25

第Ⅲ章 まとめ 29

引用・参考文献

遺物観察表

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置	1
第 2 図	調査地点の位置	3
第 3 図	調査区の位置とグリッド設定図	4
第 4 図	調査区 1－IV 層 遺構配置図	7
第 5 図	1 号掘立柱建物跡実測図および出土遺物	8
第 6 図	1 号竪穴状遺構実測図および出土遺物(1)	9
第 7 図	1 号竪穴状遺構出土遺物(2)	10
第 8 図	1～4 号土坑実測図および 2 号土坑出土遺物(1)	12
第 9 図	2 号土坑出土遺物(2)	13
第 10 図	3・4 号土坑出土遺物	14
第 11 図	1～7 号小ピット実測図および出土遺物	15
第 12 図	調査区 1－V 層 遺構配置図	16
第 13 図	1・2 号堀実測図および出土遺物	18
第 14 図	1～5 号溝実測図および出土遺物	19
第 15 図	5・6 号土坑実測図および出土遺物(1)	21
第 16 図	5・6 号土坑出土遺物(2)	22
第 17 図	8～17 号小ピット実測図および出土遺物	23
第 18 図	調査区 2 遺構配置図	24
第 19 図	3 号堀実測図(1)	26
第 20 図	3 号堀実測図(2) と出土遺物	27
第 21 図	18・19 号小ピット実測図	28
第 22 図	遺構外・攪乱出土遺物	28
第 23 図	第 11・22 地点と古丸御屋敷	29
第 24 図	新発田城の絵図	30

図 版 目 次

図版 1	1～3 号堀	図版 5	出土遺物(1)：1 号掘立柱建物跡、1 号竪穴状遺構、2 号土坑
図版 2	調査区 1－IV 層、1 号掘立柱建物跡、1 号竪穴状遺構	図版 6	出土遺物(2)：2～4 号土坑、1 号堀、2 号溝、5 号土坑
図版 3	2～4 号土坑、3 号小ピット、調査区 1 作業風景、調査区 1－V 層、1・2 号堀	図版 7	出土遺物(3)：5 号土坑、3 号堀、遺構外・攪乱
図版 4	1・2・4 号溝、5・6 号土坑、調査区 2、3 号堀、調査区 2 作業風景		

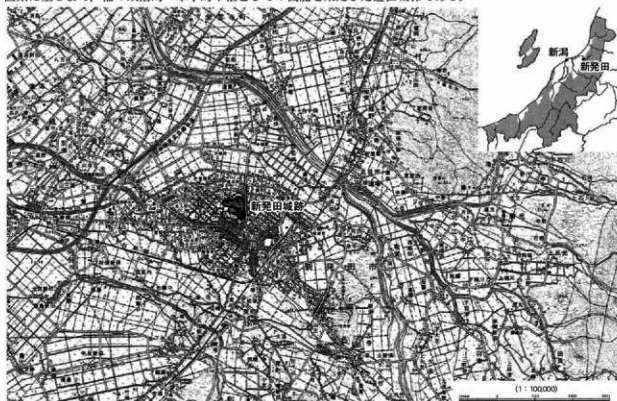
第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過

1 遺跡の位置と立地

新発田市は、新潟県の北部、新潟市の東に隣接する地方都市である。平成15年7月に北蒲原郡豊浦町と、平成17年5月に同郡紫雲寺町・加治川村と合併し、西は日本海に面した藤塚浜から、東は福島県との県境をなす飯豊連峰にまでわたる広大な市域を形成している。現在の人口は約10万6千人、総面積は532.82km²である。住宅・商業域が集中する市街地は、旧新発田藩城下町とその周辺に発達し、周囲には農村地帯が広がっている。

市域の地勢を概略すると、新潟平野の一部をなす平野部と、その東縁部の五十公野丘陵、それに続く五頭連峰・櫛形山脈からなる地域である。平野部は、東側の山地から流れてくる加治川・姫田川・坂井川などの河川的作用によって形成された扇状地・自然堤防と、海岸線に平行な砂丘列のある海岸平野、および潟湖の干拓地などによって構成されている。新発田城跡は、扇状地上の微高地に立地しているが、この扇状地は、かつて加治川の主流が五十公野丘陵の南側を流れていた時期に運ばれた砂礫が堆積して形成されたものと考えられる。(国土地理院1993)。

新発田城跡は、新発田市大手町6丁目4番16号ほかに所在する。市街地の中央に位置するこの城跡は、新発田藩主溝口氏の居城として築かれたもので、加治川の支流にあたる新発田川とその支流を利用して外堀が造られている。城の構えは、不整五角形を呈した本丸の周りを二ノ丸が取り囲み、その南に三ノ丸が突き出した、南北に長い弧形をした輪郭・梯郭式併用の平城である。慶長3(1598)年の溝口氏入封以来、明治4(1871)年の廃藩置県に至るまで、藩の政治的・軍事的中枢としての機能を果たした近世城郭である。



第1図 遺跡の位置

2 調査に至る経緯と調査体制

平成18年11月に、陸上自衛隊新発田駐屯地業務隊管理科(以下、駐屯地管理科)から新発田市教育委員会(以下、市教委)に、新発田駐屯地内に新たな施設を2基建設する計画が示された。建設予定地は、平成10年度に発掘調査を実施した第11地点(鶴巻ほか2001)の北側にあたり、江戸時代の絵図によれば、新発田城二ノ丸の古丸屋敷地付近に該当する。計画では、掘削は施設の基礎部分のみで範囲が狭いことから、市教委では、専門職員による工事立会いでの対応も含めて、駐屯地管理科との協議を進めていった。

平成19年4月に、駐屯地管理科から平成20年度に工事を実施したいとの要望が出され、併せて具体的な工事計画図面が提示された。工事内容は、当初の計画よりも大幅に掘削範囲が広がるものに変更されたため、市教委と駐屯地管理科で協議を行い、その結果、建設予定地については全面本発掘調査が必要との結論に至った。そこで、引き続き調査日程等の調整を行い、市教委が主体となって、平成20年度に本発掘調査を実施、平成21年度に整理作業および報告書の刊行を行うことで合意した。なお、発掘調査の実施計画については、隣接している第11地点の調査結果をもとに作成することとし、事前の確認調査は行わないこととした。

以上の協議結果を踏まえて、事業主体者である防衛省北関東防衛局長は、文化財保護法第94条第1項に則り、平成20年1月21日付け関防第195号で、新潟県教育委員会教育長(以下、県教育長)宛て「埋蔵文化財発掘の通知について」の文書を新発田市教育委員会教育長(以下、市教育長)に提出。これを受けて市教育長は、同年1月29日付け生学第1784号「埋蔵文化財発掘の通知について(進達)」を県教育長に進達した。県教育長は、同年2月5日付け教文第1224号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」によって、工事着手前の発掘調査実施の通知を出した。同年3月14日には、北関東防衛局長と新発田市長との間で、発掘調査の実施委託について契約を締結。市教育長は、同年5月16日付け生学第320号で、文化財保護法第99条第1項による「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を県教育長に提出した。その後、市教委が6月5日から現地調査に入った。調査体制は以下のとおりである。

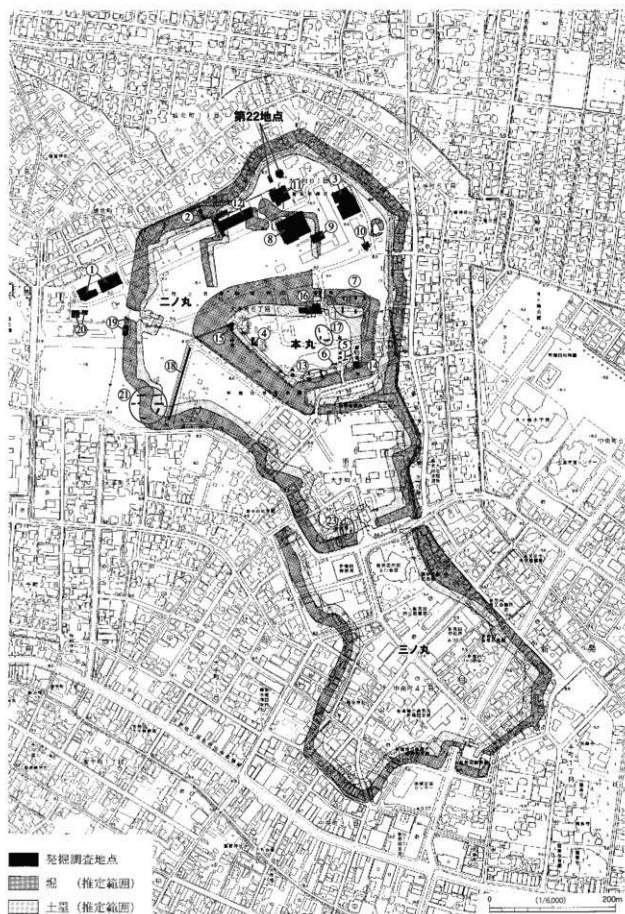
調査体制

平成20年度(発掘調査)

調査主体者	新発田市教育委員会(教育長 大滝 昇)		
監理	高澤誠太郎(教育部長)	調査担当者	津田 憲司(生涯学習課文化財技師)
総括	杉本 茂樹(生涯学習課長)	調査員	鶴巻 康志(生涯学習課埋蔵文化財係長)
	田中 耕作(生涯学習課参事)	事務局	渡邊美穂子(生涯学習課主任)

平成21年度(整理作業・報告書作成)

調査主体者	新発田市教育委員会(教育長 大滝 昇)		
監理	土田 雅徳(教育部長)	調査担当者	津田 憲司(生涯学習課文化財技師)
総括	杉本 茂樹(生涯学習課長)	調査員	鶴巻 康志(生涯学習課埋蔵文化財係長)
	田中 耕作(生涯学習課参事)	事務局	渡邊美穂子(生涯学習課主任)



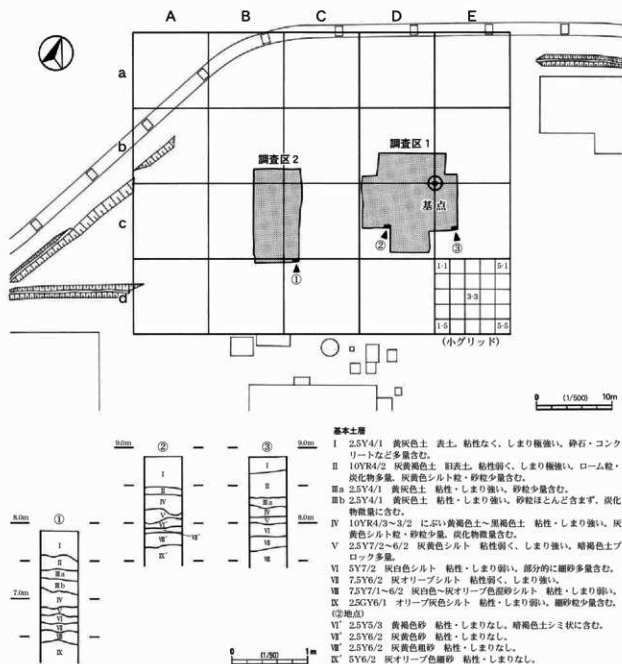
第2図 調査地点の位置

3 調査の方法と経過

調査区の設定 (第3図)

第22地点は、駐屯地内の北側、市街地との境界付近に位置している。天保期に作成された絵図と照らし合わせると、新発田城二ノ丸の古丸屋敷跡地に該当する。調査地点は2箇所あることから、東側を「調査区1」、西側を「調査区2」と呼称した。調査は、「調査区1」から着手し、終了・埋め戻しの後に「調査区2」に着手することとした。

調査区のグリッドは、施設の建設工事杭を基点として設定した。一辺10m四方の方眼を大グリッドとし、さらに大グリッドを東西・南北に五等分して2m方眼の小グリッドを設定、グリッドの名称はアルファベットと算用



第3図 調査区の位置とグリッド設定図

数字を用いて表記した。大グリッドは、西から東へ「A」・「B」…、北から南へ「a」・「b」…とし、その組み合わせで「Aa」・「Bb」…と呼称した。大グリッドを25分割した小グリッドは、西から東、北から南へそれぞれ「1」・「2」…とし、北西から「Aa1-1」・「Bb5-5」のように呼称した。

基本層序

擾乱などの影響の及んでいない場所を選び、調査区1では2箇所（Ec2-4・Dc2-3グリッド）、調査区2では1箇所（Cd1-1グリッド）にトレンチを設定、深掘りを行い、それぞれの南壁を基本土層とした。

土層は、表土を含めてⅠ～Ⅹ層に分けられる。Ⅰ層は碎石混じりの客土、Ⅱ層はしまりが極めて強い灰黄褐色土で、旧表土と考えられる。Ⅲ層は黄灰色土で、砂粒の含有量の違いからa・bの2層に分けられる。近世と近代の遺物を包含する。Ⅳ層は黒褐色ないし暗灰色土で、近世の遺物を包含する。Ⅴ層は灰黄色シルトで、以下の層は、いわゆる地山に相当する。Ⅵ層以下は、①・③地点がシルト層（Ⅵ～Ⅹ層）なのに対して、②地点では砂層（Ⅶ～Ⅹ層）と、場所によって堆積層が異なる。遺構が確認されたのは、Ⅳ層およびⅤ層の上面である。

なお、調査地点は比較的平坦のように見えるが、測量の結果、調査区1から調査区2にかけて、地表面・地山面ともに大きく傾斜していた。

現地調査の経過（日誌抄）

6月5～9日 ユニットハウス・トイレの設備および発掘器材を搬入。その後、レベル移動および工事用の基準杭を基点に調査区とグリッドの設定を行う。9日にバックホウで調査区1の表土掘削を行う。なお、周辺にガス管が埋設されていることから、掘削にはガス会社職員が立会う。

6月10～19日 調査区の安全対策を行った後、本格的な発掘調査に着手する。まず、Ⅳ層上面まで人力による掘削。精査の後、遺構プランの確認を行う。明治時代以降の擾乱が広範囲に及んでいたが、掘立柱建物跡や竪穴状遺構、土坑、小ピットを検出した。その後、各遺構の調査に入り、図面作成・写真撮影を行う。19日に調査区の完掘写真を撮影してⅣ層の調査を終了した。

6月20～30日 第Ⅴ層上面まで人力による掘削。精査の後、遺構プランの確認を行う。その結果、新たに溝や土坑、小ピットのほか、擾乱の下から堀を検出した。引き続き、各遺構の調査に入り、25日には全体の完掘写真を撮影。その後、平面図の作成を行う。30日に調査区1の調査がすべて終了。

整理作業

発掘作業終了後の8月から作業を開始した。平成20年度は、現場で作成・撮影した遺構実測図や写真の整理および出土遺物の水洗・注記といった基礎的な整理作業を行った後、遺物については、接合・復元作業を行った。平成21年度は本格的な整理作業に着手し、報告書掲載遺物の選び出しと実測、遺構・遺物図面のトレース、遺物写真の撮影を行った。なお、磁器については、実測・トレースを（株）太陽測地社に委託して実施した。その後、図版版下の作成、原稿執筆を行い、報告書の印刷・刊行を行った。

7月2～3日 バックホウで調査区1を埋め戻した後、調査区2の表土掘削を行う。なお、調査区1と同様、掘削にはガス会社職員が立会う。

7月4～28日 人力による掘削を開始。Ⅳ層上面まで掘り下げたが、明治時代以降の擾乱が広範囲に及んでおり、遺構プランを確認することができなかった。そこで、Ⅴ層まで引き続き掘り下げ、再度プラン確認を行う。その結果、調査区ほぼ全面が、堀に該当することが明らかとなった。サブトレンチを2箇所設定し、堀底までの深さを確認したところ、深さが1m以上となることがわかった。よって、掘削土量を考慮し、調査区の北半部については、重機で掘削することとした。22日にバックホウで掘削。その後は人力で掘り下げ、堀底を検出、図面の作成を行った。なお、堀底からは湧水が著しく、水中ポンプで常時排水しながらの調査となった。24日に調査区の完掘写真を撮影。引き続き、レベルリングなど図面の補足を行う。28日に発掘器材を搬出。29・30日にユニットハウス・トイレの設備を搬出して、現場調査を終了した。

第Ⅱ章 遺構と遺物

第22地点は、調査区1・2ともに、明治時代以降の擾乱が広い範囲に及んでいたにも係わらず、比較的良好な状態で遺構が検出された。調査区1では、IV層およびV層の各上面で遺構を確認した。検出した遺構は、堀2本、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、土坑6基、小ピット17基である。調査区2では、V層の上面で、堀1本、小ピット2基を検出している。今回の調査地点から出土した遺物は、近世(19世紀代～幕末期)の陶磁器・土器類が中心であるが、中世の陶磁器類も少量ながら見つかった。

以下、調査区・確認面ごとに遺構・遺物について記述していくこととする。なお、個々の遺物の詳しい観察内容については、本文の最後に一覧表にしてまとめて記載した。

1 調査区1-IV層

IV層の上面で検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、土坑4基、小ピット7基である。主に、擾乱の影響があまり及んでいない調査区の東半部で検出された(第4図)。時期については、IV層および各遺構の出土遺物から判断して、19世紀後半(幕末期を含む)に該当すると考えられる。なお、調査区西側の擾乱(Db3-4~Dc1-3グリッド)からは、明治時代に敷設された旧日本帝国陸軍新発田連隊専用の木製簡易水道管とその枕木が見つかった。

1号掘立柱建物跡(第5図)

調査区の東側、Dc4-1~Ec1-4グリッドで、礎盤石を持つ柱穴を4基(P1~P4)検出した。建物自体は、さらに東側の調査区外へ延びると想定されるため、全体の規模は不明である。確認できた規模は、桁行は2間以上で柱間寸法が3.5m、梁行は1間で柱間寸法が5.0m。梁行の柱間は桁行のそれよりも1.5m長い。主軸はN-74°-Eで、東西のグリッドラインにほぼ平行する。なお、P1・P2については、1号竪穴状遺構の埋土を掘り込んで作られていた。

柱穴の上層は、多量の礫などを含んだ擾乱層であるが、土層断面の観察から、埋土の沈み込みなどによって入り込んだものと判断した。平面は、P1・P2が1m四方の矩形、P3・P4は長軸100cm、短軸80cmの楕円形である。確認面からの深さは、P1・P2が70cmに対して、P3・P4は50~60cmとやや浅い。これは、地形が北に向かって緩やかに傾斜しているためであり、標高でみると、いずれも7.4mと同じ高さにそう。礎盤石は、柱穴の底面に据え置かれた状態で検出された。いずれも長短30~40cm、厚さ約14cmの扁平な自然石を使用しており、加工痕は確認できなかった。また、柱痕や柱の抜き取り跡は認められていない。

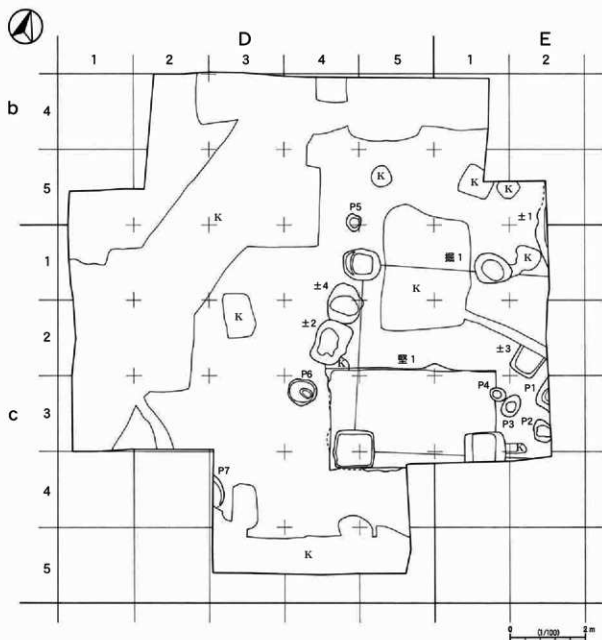
遺物は、すべての柱穴から出土しているが、数量はわずかである。種別は陶磁器と銅銭である。出土層位は、P1が黒褐色土(1層)、P3が黒褐色土(1層)、P4が暗青灰色シルト質土(2層)である。なお、P2については、土層観察を行えなかったため、出土層位は不明である。

出土した遺物の内容は、磁器が染付の碗と皿(肥前産)、陶器が小皿や行平鍋などである。いずれも小片のため、図化することができたのは1点のみである。染付の碗(1)は、P2から出土したものである。断面に漆が付着していることから、漆継をしたものと考えられる。19世紀代の所産で、肥前産と推定される。なお銅銭については、P4から1点出土したが、小片である上に表面の錆化が著しく、文字などの判読もできなかったため、図化していない。

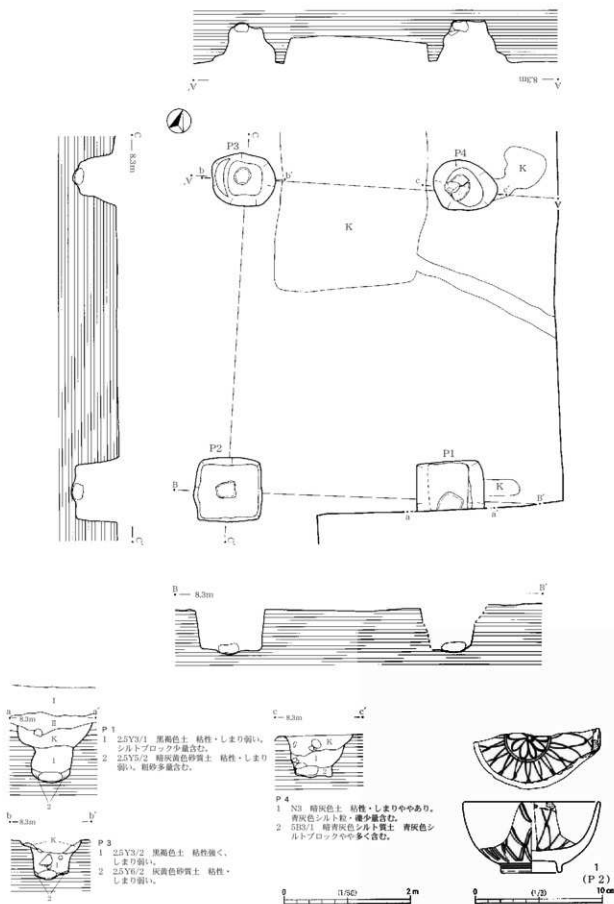
1号竪穴状遺構 (第6・7図)

調査区の東側、Dc4-2~Ec1-4グリッドに位置し、1号掘立柱建物跡と一部重複する。新旧関係は、本遺構の方が古い。平面は長方形で、規模は長軸4.5m、短軸2.7m、確認面からの深さは1.1mである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。主軸はN-72°-Eで、東西グリッドラインと一致する。埋土は砂質土とシルト質土が主体で、6層に分けられる。下層になるに従って水分を含み、底面からは水が浸み出した。

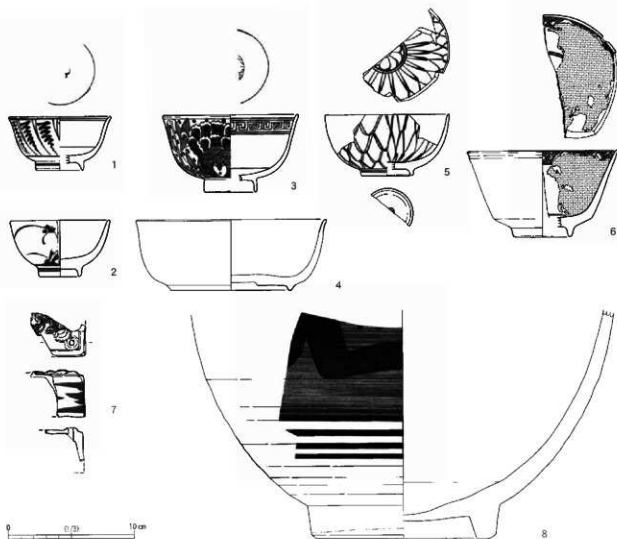
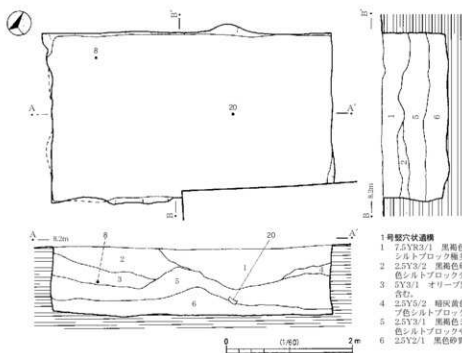
出土した遺物の数量は、調査した遺構の中ではもっとも多い。ここでは、21点を図化した。遺物は、主に黒褐色シルト質土(5層)から出土している。掲載した遺物も、1層出土の窯道具(11)以外はすべて5層からの出土である。種別は陶磁器・瓦器・土器・瓦・石製品・土製品で、出土量は陶磁器がもっとも多い。そのほかには、黒褐色土(1層)から陶磁器(陶製品含む)と土器、オリーブ黒色砂質土(3層)から磁器が出土しているが、いずれも小片で数量もわずかでしかない。それ以外の土層からは遺物の出土は認められなかった。



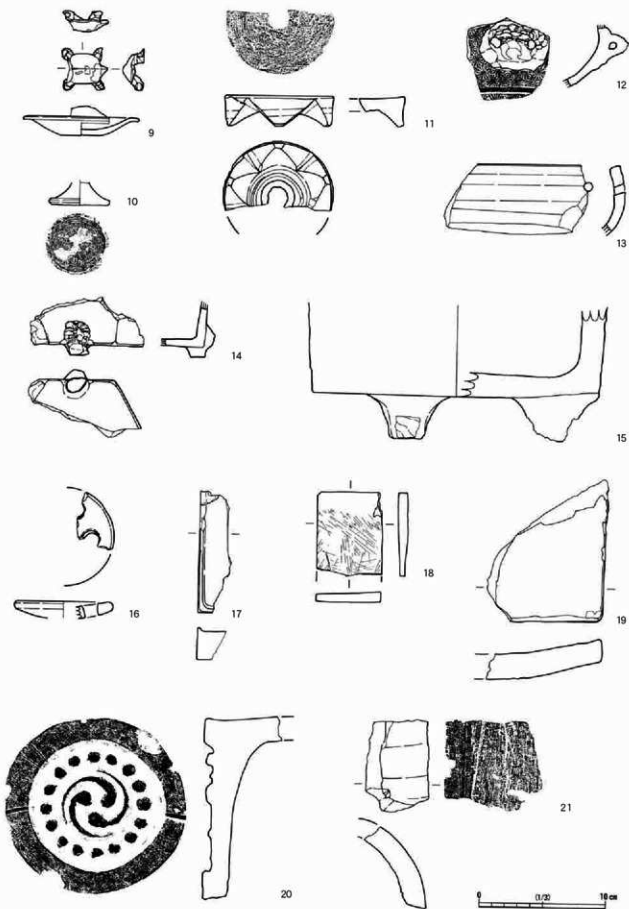
第4図 調査区1-IV層 遺構配置図



第5図 1号掘立柱建物跡実測図および出土遺物



第6図 1号竪穴状遺構実測図および出土遺物(1)



第7圖 1号豎穴状遺構出土遺物(2)

以下、遺物の内容について記す。磁器は、染付の碗が主体で、それ以外では皿・水滴・香炉・御神酒徳利がわずかに出土している。図化したのは7点である。陶器は、鉢(8)や蓋(9)・台付乗燭(10)のほかに、刷毛目碗や皿・土瓶・土鍋・播鉢が出土している。陶製品は、窯道具として使われた焼台(11)が1点だけ出土した。瓦器は、火鉢(12)のほか、器形が不明な破片がわずかに出土している。土器は、小片のため器形が不明なものが多い。図化したものは焙烙(13)・炬炬(14)・火鉢(15)・目皿(16)である。そのうち、目皿については、さらに別個体の破片が2点出土している。また、図化していないが、かわらけも出土している。瓦は、煙し焼きされた黒瓦のほかに、施釉された赤瓦が2点だけ出土している。種類は、前者が軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦、後者が丸瓦と平瓦である。主に小片で、文様のわかる瓦当部分はほとんど出土しなかった。石製品は、図化した硯(17)と砥石(18)の2点のみの出土である。土製品は、人形が出土したが、破片のため図化していない。なお、中世の珠洲焼の裏片が1点出土しているが、混入したものと考えられる。

1号土坑 (第8図)

調査区の東壁際、Eb2-5～Ec2-1グリッドに位置する。大半が東側の調査区外へ延びるため、全体の規模は不明である。確認できた規模は、長軸235cm、短軸30cmで、確認面からの深さは75～80cmである。平面は楕円形で、主軸は南北のグリッドラインにほぼ平行するものと推定される。埋土は、シルトブロックを極めて多量に含む灰色シルト質土の単一層である。断面の観察から、底面はほぼ平坦で、壁は上方に開きながら立ち上がる。遺物は出土していない。

2号土坑 (第8・9図)

調査区の中央、Dc4-2グリッドに位置する。4号土坑を一部壊して掘り込んでいる。平面は隅丸の長方形で、長軸120cm、短軸88cm、確認面からの深さは75cmである。埋土は、上半部はシルト質土、下半部は黒色土で、4層に分けられる。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

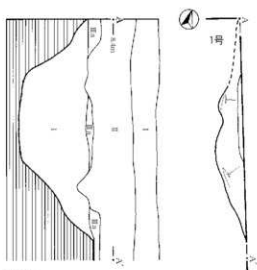
底面直上からは、木製の桶が出土している。桶はいわゆる結桶で、正位に置かれたものが埋土の圧力で潰れたものと考えられる。底板1点と樽板11点を検出した。底板は16.5×17.5cmの円形で厚さは1.0cm。取り上げて水洗したところ、中央に3.3×1.0cmの楕円形の細長い孔が確認されたが、それが加工によるものなのか腐食によるものなのかは判然としない。樽板は、幅5.0～6.0cm、厚さは0.4～0.5cmのものが主体である。そのほかにも、床面直上からは、板材が4点出土している。ただし何の部材かは不明である。その内の1点は、桶底板から12cm離れて検出された方形の板材である。板目で、22.0×19.5cm、厚さは2.0cmである。

遺物は、主に暗灰色シルト質土(2層)と灰色シルト質土(3層)から出土している。種別は、陶磁器のほかには土器と瓦である。磁器は、図化した碗(1)・餌入れ(2)・蓋(3)以外では、染付の徳利などが認められるが、いずれも小片で数量もわずかでしかない。陶器も、図化したもの(4～11)以外では、土瓶の破片がわずかに出土しただけである。瓦については、小片で瓦当部も出土していないことから図化していない。そのほかにも、4層から黒色・赤色の漆膜を検出した。木製の漆製品があったものと考えられる。

3号土坑 (第8・10図)

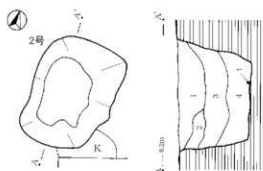
調査区の東壁近く、Ec2-2グリッドに位置する。北側が攪乱によって壊されているため、正確な規模は不明だが、平面は長方形と推定される。確認できた規模は、長軸方向は70cmで、短軸は75cm、確認面からの深さは20cmである。底面はほぼ平坦で、壁は上方にやや開き気味に立ち上がる。埋土は、灰色シルトの単一層である。

遺物は、瓦器の火鉢(1)のほかに、器形不明の陶器小片が1点出土しただけである。なお、1はⅢa層出土の破片と接合したが、これは攪乱もしくは後世の削平などの影響により、破片の一部がⅢa層に混ざり込んだためと考えられる。

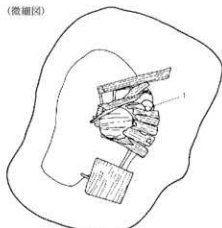


1号土坑

1 5Y4/1 灰色シルト質土 粘性弱く、しまり強い。灰黄色シルトブロック極多量含む。

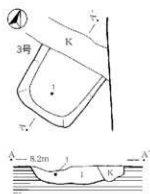
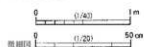


(微細図)



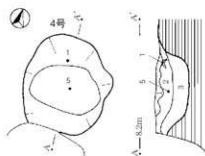
2号土坑

- 1 N2 灰色シルト質土 粘性なく、しまりややあり。地山のオリブ灰色シルトや多く、炭化粒少量含む。
- 2 N3 暗灰色シルト質土 粘性なく、しまりややあり。地山のオリブ灰色シルト少量含む。
- 3 N4 灰色シルト質土 粘性なく、しまりややあり。オリブ灰色シルトブロックやや多く、ローム粒少量含む。
- 4 N1.5 黒色土 粘性ややあり、しまり強い。地山のオリブ灰色シルトやや多く、ローム粒少量含む。



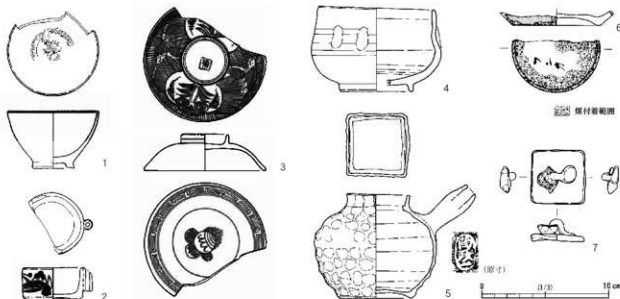
3号土坑

1 7.5Y4/1 灰色シルト 粘性なく、しまりややあり。礫や多く含む。

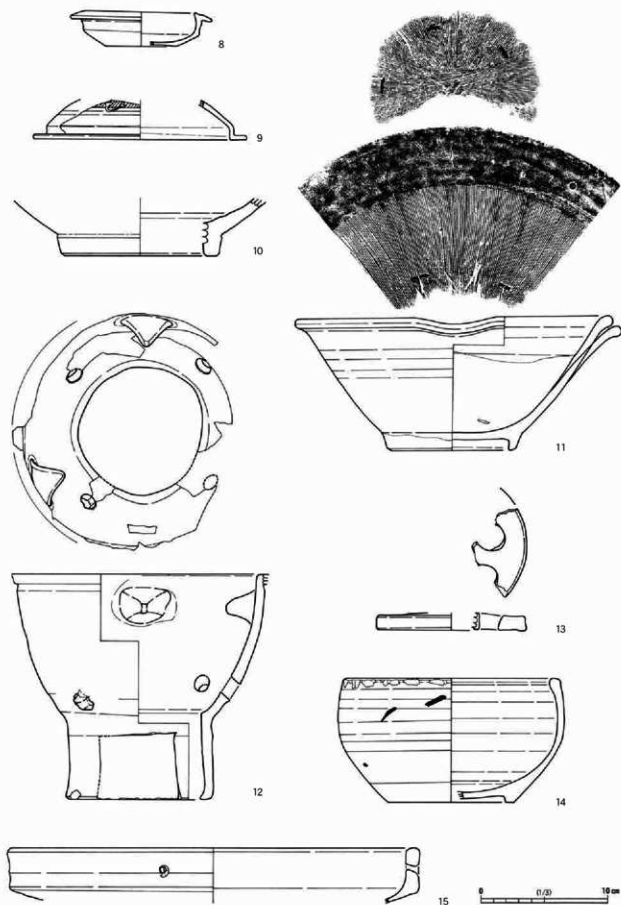


4号土坑

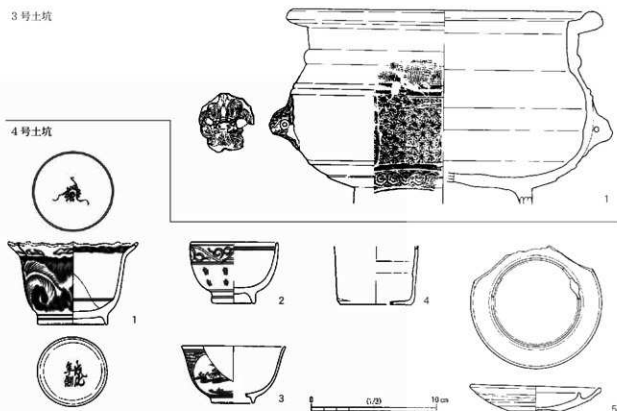
- 1 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 粘性強く、しまりなし。炭化物・粗砂・礫多量含む。
- 2 2.5Y4/2 暗灰色土 粘性弱く、しまり強い。シルト粒多量含む。
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色土 粘性・しまり強い。灰黄色シルト粒・砂粒少量、炭化物微量含む。



第8図 1～4号土坑実測図および2号土坑出土遺物(1)



第9圖 2号土坑出土遺物(2)



第10図 3・4号土坑出土遺物

4号土坑 (第8・10図)

調査区のほぼ中央、Dc4-1～Dc4-2グリッドに位置する。2号土坑に一部壊されていることから、新旧関係は、2号土坑よりも古い。平面はやや不整な楕円形で、長軸100cm、短軸90cm、確認面からの深さは35cmである。底面は平坦で、壁は上方に開きながら立ち上がる。埋土は3層に分けられる。

遺物は、黒褐色砂質土(1層)および暗灰黄色土(2層)から出土している。図化した5点以外はすべて小片で、数量もわずかである。種別は、陶磁器と土器である。その内容は、磁器が染付碗(1～3)や燗德利(4)、陶器が燈火受付皿(5)のほかは鉢・土鍋・蓋などである。土器は器形が不明である。

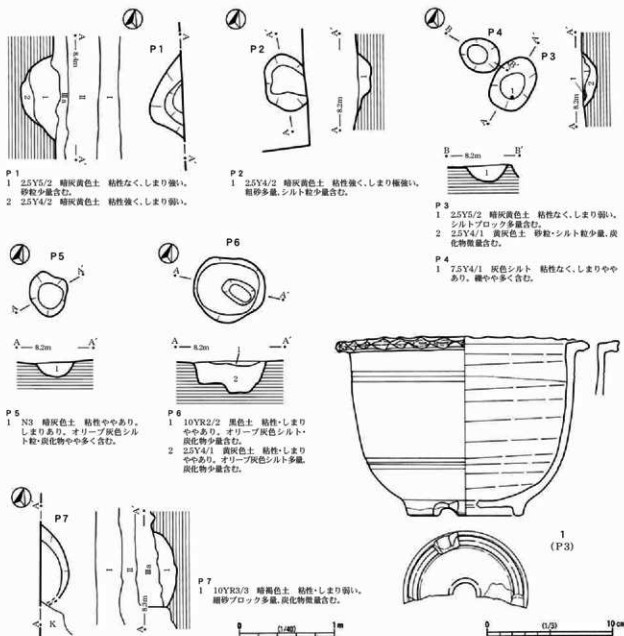
1～7号小ピット (P1～P7) (第11図)

P1は、Ec2-3グリッドに位置する。一部が調査区外へ延びているため、正確な規模は不明である。平面は隅丸の長方形で、確認面からの深さは40cmである。底面は緩やかな弧状で、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は暗灰黄色土で、2層に分けられる。遺物は出土していない。

P2は、Ec2-3グリッドに位置する。一部が調査区外へ延びるため、正確な規模は不明である。平面は長軸が52cmのやや不整な楕円形で、確認面からの深さは15cmと浅い。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は暗灰黄色土の単一層で、遺物は出土していない。

P3は、Ec1-3～2-3に位置する。平面は長軸60cm、短軸43cmの楕円形で、確認面からの深さは15cmと浅い。底面は緩やかな弧状で、壁も緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰黄色土(1層)と黄灰土(2層)に分けられる。遺物は主に1層から出土しているが、2層からもわずかに出土している。種別は、陶器のほかは瓦と土器である。陶器と土器は、図化した植木鉢(1)以外はいずれも小片で、器形は不明である。瓦は、黒色の平瓦である。

P4は、Ec1-3グリッドに位置する。P3の東側に近接し、1号竪穴状遺構の一部壊して掘り込んでいる。平面は長軸45cm、短軸35cmの楕円形で、確認面からの深さは17cmとやや浅い。底面はやや平坦で、壁はなだらか



第11図 1～7号小ピット実測図および出土遺物

に立ち上がる。埋土は灰色シルトの単一層で、遺物は陶器の小片が2点のみ出土している。

P5は、Db4-5～Dc4-1グリッドに位置する。平面は長軸45cm、短軸42cmの不整な円形で、確認面からの深さは15cmと浅い。底面は緩やかな弧状で、なだらかに立ち上がる。埋土は暗灰色土の単一層で、出土遺物はない。

P6は、1号竪穴状遺構の東、Dc4-3グリッドに位置する。平面は長軸77cm、短軸70cmのやや不整な円形で、確認面から最も深い箇所まで34cmである。底面は平坦で、東側が一段深く掘り込まれており、壁はやや垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。遺物は、黄灰色土（2層）から陶磁器と土器がわずかに出土しているが、いずれも小片のため図化していない。磁器は染付の碗・皿、陶器は行平鍋蓋、土器は器形が不明である。そのほかに、古代の須恵器破片が2点混入している。

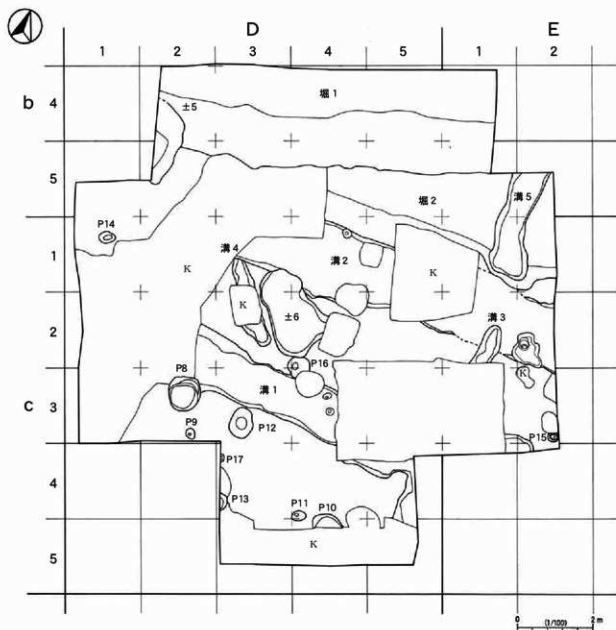
P7は、Dc3-4グリッドに位置する。大半が西側の調査区外へ延びており、また南側の一部が攪乱によって壊されていることから、全体の規模は不明である。平面は楕円形と推定される。確認面からの深さは19cm、底面は弧状気味で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単一層で、遺物は出土していない。

2 調査区1-V層

V層の上面で検出した遺構は、堀2本、溝5条、土坑2基、小ピット9基である(第12図)。攪乱およびIV層検出の遺構の影響が調査区域に広く及んでいたにも係わらず、遺存状態は比較的良好であった。ただし、確実に本層位に伴う遺構からは、遺物がほとんど出土していないため、時期の同定は難しい。IV層を19世紀後半(幕末期を含む)としたことから、ここでは19世紀前半と考えておきたい。

1・2号堀 (第13図)

調査区の北側、Db2-4~Ec2-1グリッドに位置する。一部、攪乱によって壊されているが、遺存状態は比較的良好であった。新旧関係は、2号堀を掘削した後に1号堀を掘削している。なお、土層断面を観察したところ、どちらもIV層から掘り込まれていることが確認できたが、平面プランを確認できたのはV層上面であったので、今回は同層での検出遺構として報告する。帰属年代は、IV層からの掘削なので、19世紀後半と考えられる。



第12図 調査区1-V層 遺構配置図

1号堀は、東西グリッドラインに沿って延びる。西側の一部は、5号土坑によって壊されている。堀の掘り込み際、いわゆる肩部は、南側では検出できたが、北側については調査区外のため検出できていない。よって、正確な堀の幅は不明である。確認できた規模は、幅が2.80mで、底面までの深さは、確認面から1.56m、IV層上面からは1.90mである。掘り込みの傾斜は比較的緩やかで、底面近くではさらになだらかになる。なお、掘り込み斜面の下位、底面から30cm程の高さに、幅30～60cmほどのテラス面が部分的に認められる。埋土は4層に分けられ、底面からは水が浸み出した。遺物は、1・3層から陶磁器と土器が出土したほかは、2層から陶器と古代の土師器製の破片が1点ずつ出土しただけである。磁器は、青磁の碗(1)と白磁の皿(2)が出土した。15世紀の所産と考えられる。陶器は、図化したもの(3～7)以外は、鉢などの破片が3点出土しただけである。土器は数量がもっとも多い。いずれもかわらけであるが、図化したもの(8)以外は、いずれも小片で磨滅している。

2号堀は、東西方向に沿って延びる。2号溝を壊して掘り込んでおり、また5号溝の上部を削平している。1号堀によってかなり壊されているため堀幅の正確な規模は不明である。深さは、確認面から25～30cm、IV層上面からは50cmほどで、掘り込みの傾斜はやや緩やかである。埋土は2層に分けられる。遺物は、5・6層から陶器と土器がわずかに出土している。陶器は珠洲焼の甕、土器はかわらけである。そのほかに、平瓦(赤瓦)が1点出土している。ただし、いずれも小片のため、図化していない。

1～5号溝 (第14図)

1号溝は、Dc2-2～Ec2-4グリッドに位置する。Dc2-2グリッドより西側は攪乱によって完全に壊されており、また1号竪穴状遺構やP6・P8・P16にも一部壊されている。幅は1.2～1.6mで、調査区の南側を東西方向に走る。確認面からの深さは16cmと浅く、底面はやや凹凸がある。埋土は黒褐色土で、2層に分けられる。遺物は、かわらけなどの土器小片がわずかに出土しているだけである。

2号溝は、Dc3-1～Ec2-3グリッドに位置する。西側は、1号溝と同様、攪乱によって壊されているほか、後世の削平によって消失している。また、4・6号土坑や1号掘立柱建物跡(P3)、2号堀、3号溝にも一部壊されており、遺存状態はあまり良好ではない。幅は1.7mで、調査区の中央を1号溝と平行して走る。確認面からの深さは10～16cmと浅く、底面は凹凸がある。埋土は3層に分けられ、そのうち遺物が出土しているのは1層の黒褐色土である。遺物は、図化した陶器の小壺(1)以外は、かわらけの小片が少量と珠洲焼の甕破片が1点出土した。

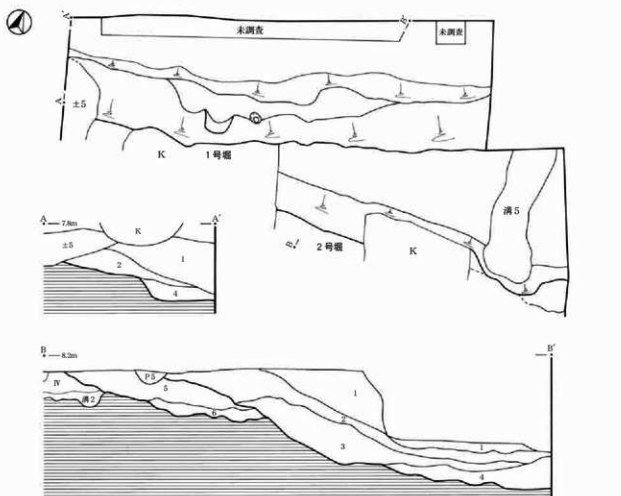
3号溝は、Ec1-2～Dc5-5グリッドに位置する。攪乱および1号竪穴状遺構によってかなりの部分が壊されているため、遺存状態はあまり良好ではない。幅は46～70cmで、調査区の東側を1・2号溝に直交してほぼ南北方向に走る。遺構の切り合い関係から、2号溝よりは新しいが、1号溝との新旧関係は判然としにくい。確認面からの深さは10～26cmで、南側に向かうに従って深くなる。底面はほぼ平坦で、埋土は黒褐色土と同色砂質土の2層に分けられる。遺物は土器小片が1点のみ出土している。

4号溝は、Dc3-1～3-2グリッドに位置する。攪乱および2号溝によって壊されているため、遺存状態はあまり良好ではない。幅は最大で60cmで、調査区の中央やや西側を南東から北西方向に走る。確認面からの深さは10cm程と浅く、遺物は出土していない。

5号溝は、Eb1-5～Ec2-1グリッドに位置する。2号堀の下から検出された。幅は70～100cmで、調査区の東側を南北方向に走る。上部は2号堀によってかなり削平されているため、検出時の深さは10cm程と浅い。埋土は黒色土の単一層で、遺物は出土していない。

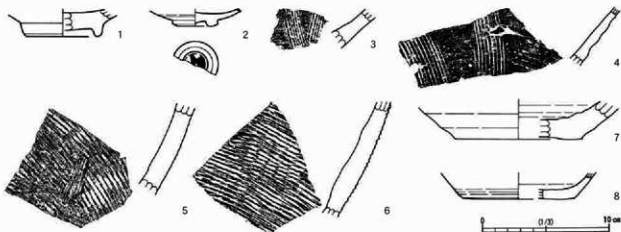
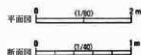
5号土坑 (第15・16図)

調査区の北西部、Db2-4～2-5グリッドに位置する。大半が西側の調査区外へ延びることや、北側の一部が

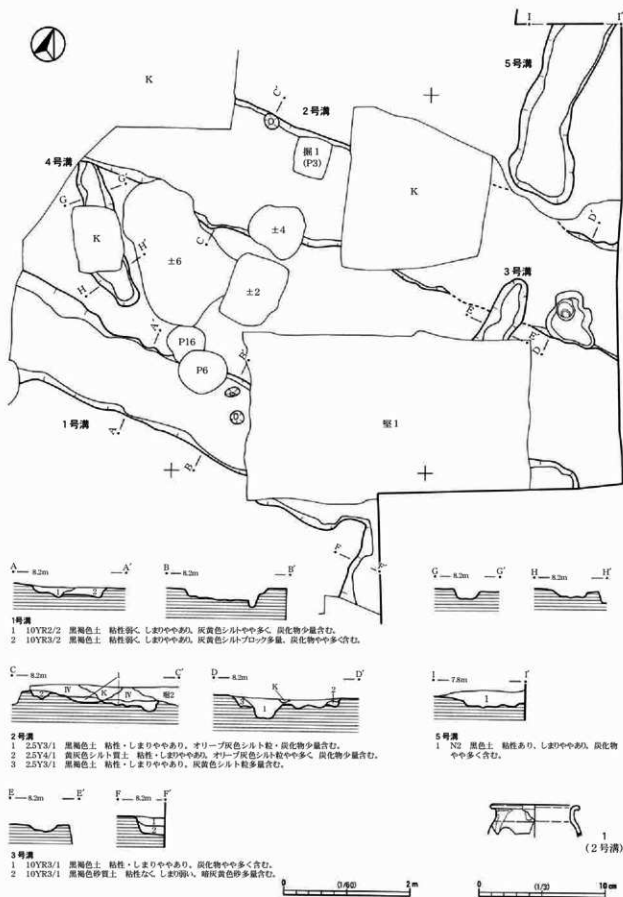


1・2号堀

- 1 5Y4/1 灰色土 粘性・しまり弱い。砂粒少量。シルトブロック・炭化物粒微量含む。
- 2 5Y5/1 灰黄色シルト 粘性弱く、しまり強い。シルトブロックがシミ状に広がる。砂粒少量。炭化物粒微量含む。色調は青味が強い。
- 3 5Y4/1 灰色土 粘性弱く、しまり強い。シルト粒少量。砂粒・炭化物粒微量含む。
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色土 粘性強く、しまり強い。3層を主体とし、未分解植物多量含む。
- 5 2.5Y4/1 黄灰色シルト 粘性弱く、しまり強い。シルトブロック少量。灰黄色粗砂をブロック状に含む。
- 6 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性極強く、しまり強い。落ち際にシルトブロック少量含む。



第13図 1・2号堀実測図および出土遺物



擾乱によって壊されているため、全体の規模は不明である。平面は、隅丸の長方形の可能性が考えられる。確認面からの深さは35cm、底面はやや平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は黒褐色土で、2層に分けられる。なお、検出したのはV層上面であるが、1号堀を壊して掘り込んでいることから、帰属年代は19世紀後半と考えられる。

遺物は、手焙り(8)以外は、小片も含めてすべて1層から出土している。種別は、陶磁器と土器・土製品、そして木製品である。磁器では、染付の碗・皿が出土している。数量は少ない。推定生産地は、肥前産のほかには瀬戸・美濃産がわずかに含まれる。3点(1・3)を図化した。なお、2の広東碗については、当初はⅢa層からの出土としていたが、検討の結果、本遺構からの出土と判断した。陶器は、図化した碗・蓋・台付乗櫛・手焙り(4～8)以外では、鉢・楕鉢・土鍋・土瓶が出土している。数量は少ない。土器は、図化した七厘と壺(10・11)以外では、かわらけなどの小片がわずかに出土している。土製品は、図化した人形(9)以外に、別個体と考えられる人形の小片が2点出土している。木製品は下駄と馬形が出土している。下駄は一足、2点(12・13)が重なった状態で出土した。前歯は台と一体で三角形に削り出されているが、後歯は台の裏に刻まれた溝に差し込む構造になっている。ホゾ穴は無い。どちらも全面に黒色漆が塗布されている。馬形木製品(14)は、半截した丸太材から削り出して作られている。首部には鬘をはめ込むための切り込みが入れられ、腹部には脚をはめ込むための穴が4箇所(1箇所欠損)、尻部には尾を差し込むための穴が1箇所あけられている。

6号土坑 (第15・16図)

調査区の中央部、Dc3-1～4-2グリッドに位置する。2号溝と16号小ピットを一部壊して掘り込んでおり、2号土坑に一部壊されている。平面は長軸2.2m、短軸1.3mの不整な隅丸の長方形で、確認面からの深さは15cm程と浅い。底面は凹凸があり、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は黒色土の単一層で、土器が少量出土している。図化したのは2点(1・2)で、それ以外はいずれも小片で器形は不明である。

8～17号小ピット (P8～P17) (第17図)

P8は、Dc2-3グリッドに位置する。北側の一部が擾乱によって壊されている。平面は長軸92cm、短軸84cmのやや不整な円形である。確認面からの深さは50cmで、埋土は4層に分けられる。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。遺物は、黒色シルト(4層)から磁器の染付碗の破片が1点のみ出土しているが、小片のため図化していない。

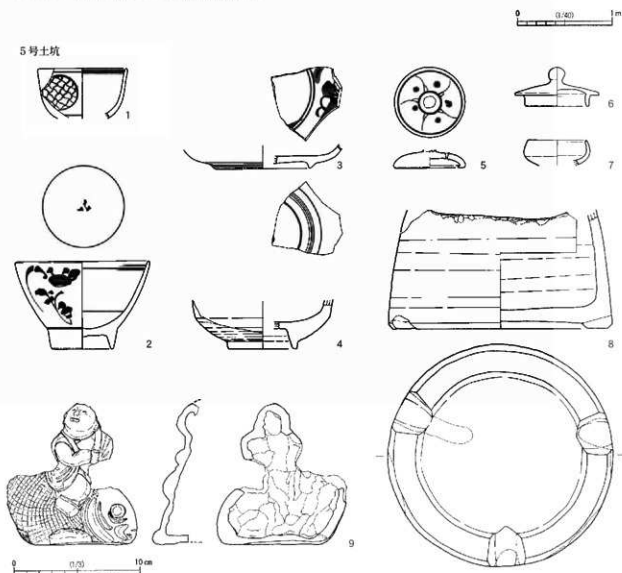
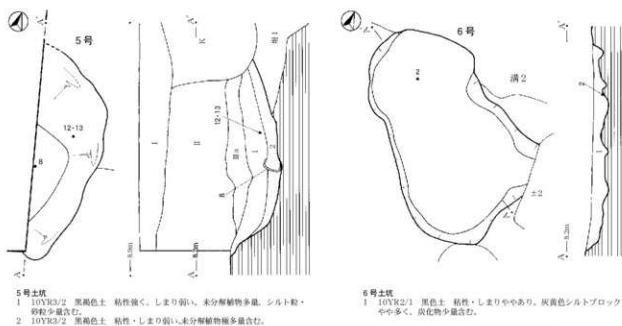
P9は、Dc2-3グリッド、P8から50cmほど南に位置する。平面は長軸28cm、短軸24cmの円形である。確認面からの深さは12cmと浅く、埋土は黒褐色土の単一層である。断面は、弧状の底面から壁がなだらかに立ち上がる。遺物は、土師器の小片がわずかに出土している。

P10は、Dc4-4～4-5グリッドに位置する。南半部が擾乱によって壊されているため、正確な規模は不明である。平面は楕円形か。確認面からの深さは28cmで、埋土は3層に分けられる。底面は平坦で、壁はやや垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

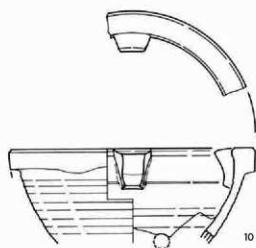
P11は、Dc4-4グリッド、P10の西に位置する。平面は長軸37cm、短軸25cmの楕円形で、確認面からの深さは25cmである。壁は底面から急な傾斜で立ち上がる。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は出土していない。

P12は、Dc3-3グリッドに位置する。平面は長軸80cm、短軸61cmの楕円形で、確認面からの深さは25cmである。底面はやや平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は出土していない。

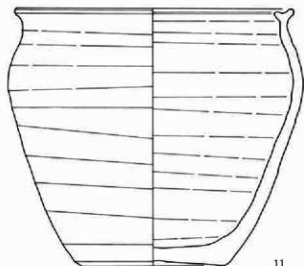
P13は、Dc3-4グリッドに位置する。大半が西側の調査区外へ延びており、またP7に一部壊されているため、全体の規模は不明である。確認面からの深さは20cm、底面はほぼ平坦で、壁はやや垂直に立ち上がる。埋土は暗灰黄色土の単一層で、遺物は出土していない。



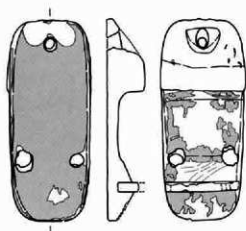
第15図 5・6号土坑実測図および出土遺物(1)



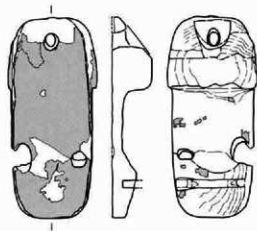
10



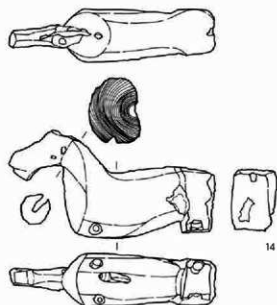
11



12



13



14

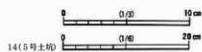
6号土坑



1

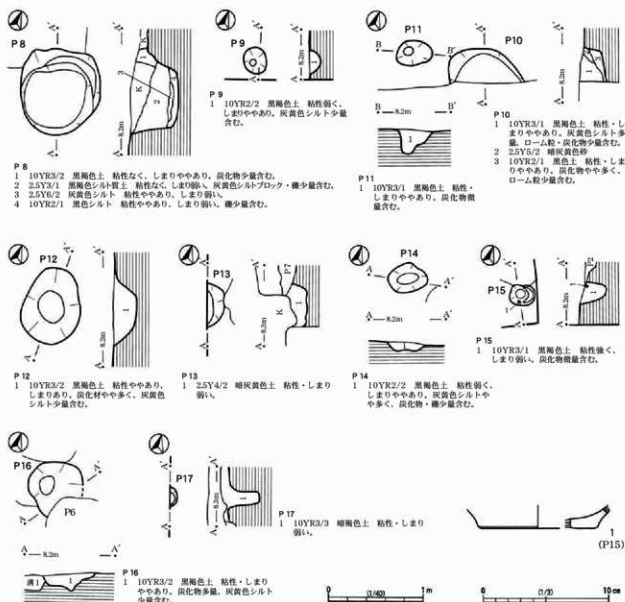


2



14(5号土坑)

第16圖 5・6号土坑出土遺物(2)



第17図 8～17号小ピット実測図および出土遺物

P14は、Dc1-1グリッドに位置する。平面は長軸42cm、短軸30cmのやや不整な楕円形である。確認面からの深さは9cmと浅い。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は出土していない。

P15は、Ec2-3グリッドに位置し、P2に一部壊されている。平面は長軸27cm、短軸21cmのやや不整な楕円形で、確認面からの深さは24cmとやや深い。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物はかわらけが1点(1)出土している。

P16は、Dc3-2～4-3グリッドに位置する。1号溝を一部壊して掘り込んでおり、また、6号土坑とP6に一部壊されている。平面は径60cmほどのやや不整な円形を呈すると想定される。確認面から底面までは、最も深い部分で23cm、埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

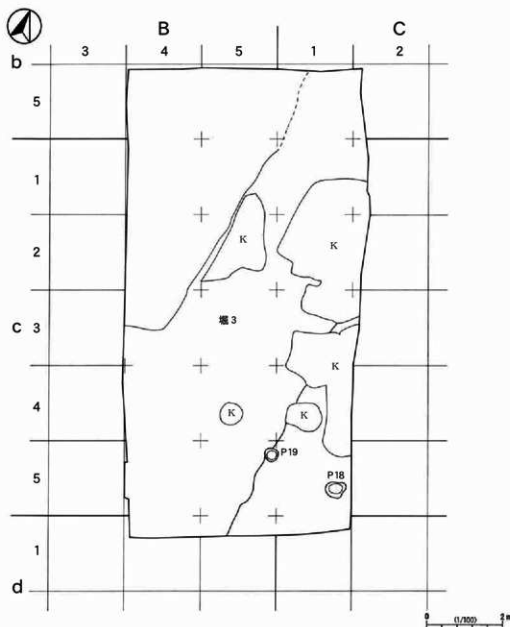
P17は、Dc3-4グリッドに位置し、P7の北側に近接する。大半が調査区外へ延びるため、正確な規模は不明だが、平面は径20cmほどの円形と推定される。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは33cmで、埋土は暗褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

3 調査区2

調査区1から8m離れた西側に位置する。当初は、IV層上面で精査を行ったが、調査区全面に攪乱の影響が及んでいたため、遺構プランを確認することができなかった。そこで、引き続きV層上面まで掘り下げたところ、一部攪乱の影響が及んでいたが、遺構を検出することができた。検出した遺構は、堀1本、小ピット2基である。遺構の時期は、出土遺物から判断して、19世紀代と考えられる。

3号堀（第19～21図）

Bc5-5～Cd1-1グリッドを除いた調査区のほぼ全面で検出した。平面プランを確認したのはV層上面であるが、調査区南壁で土層断面を観察したところ、1・2号堀と同様、IV層上面から掘り込まれていることが確認できた。なお、底面からは湧水が著しく、特にCb1-5グリッド付近では、地山が砂ということもあって、底面や掘り込み斜面部は検出と同時に崩壊してしまい、記録を作成することができなかった。



第18図 調査区2 遺構配置図

堀は、南北方向に沿って延びており、そのまま延長すると、調査区1で検出した2号堀と直交する位置関係となる。肩部は、東側については検出したが、西側については調査区外のため確認できていない。そのため、堀幅の正確な規模は不明である。検出した東側の肩部についても、攪乱の影響が及んでおり、あまり良好な遺存状態ではなかった。確認できた幅は最大で6.2m、確認面から底面までの深さは1.1mで、三段に掘り込まれている。一段目は、確認面からの深さが30～40cmで、垂直気味に掘り込まれている。テラス面の幅は1.3～1.7mである。二段目は、一段目からの深さが40～50cmで、ややなだらかに掘り込まれている。テラス面の幅は1.3mである。そして、二段目から深さ20～25cmほど掘り込んで、底面に至る。掘り込みの傾斜は、二段目と同様にややなだらかである。底面は平坦で、幅が4.4m以上と推定される。埋土は、細分したものも含め、32層に分けられる。最下層には未分解の植物を多く含んだ黒色・黒褐色粘質土が水平に堆積し、その上に砂質土やシルトなどが斜めに堆積する。なお、二段目のテラス面から下の地山は、青灰色細砂もしくは灰色砂のため、脆弱であった。

遺物は、1a・1c・5a・5b・6a・16・10・19層から出土している。陶器と土器が主体で、それ以外には磁器・瓦器・瓦がわずかに出土している。以下、出土層ごとに遺物の内容について記す。1a層からは、唐津産の陶器皿(2)以外に、かわらけの小片が少量出土している。1c層からは、黒色の平瓦片が1点だけ出土している。5a層は遺物の出土量がもっとも多い。陶器では、内禿皿(1)や播鉢(4)のほかに、肥前産の緑溝皿や瀬戸・美濃産の碗、越前産の甕・播鉢の小片が出土している。そのほかに、土器ではかわらけの小片が少量、瓦器では風炉の破片が1点、瓦は黒色の丸瓦(8)が1点出土している。5b層からは、磁器の染付皿の小片が1点、陶器は甕(6)と壺の破片、土器はかわらけの小片が2点出土している。6a層からは陶器の鉢が1点、10層からは唐津産の陶器皿(3)と越前産の播鉢(5)の2点、16層からは黒色の平瓦が1点出土している。19層からは、染付の徳利と土器のかわらけがそれぞれ1点ずつ出土している。なお、古代の土師器甕の破片が1a層から少量出土しているが、混入によるものと考えられる。

18・19号小ピット (P18・19) (第22図)

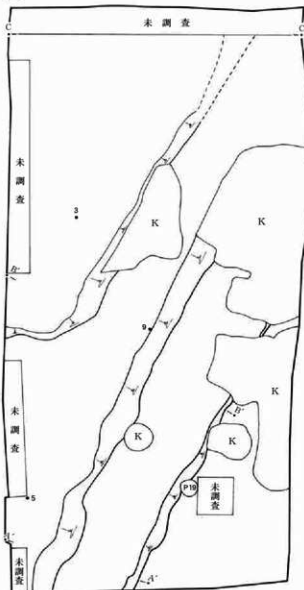
P18は、Cc1-5グリッドに位置する。平面は長軸47cm、短軸40cmのやや不整な楕円形で、確認面からの深さは35cmとやや深い。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、黒褐色土の単一層だが、攪乱層が入り込む。遺物は出土していない。

P19は、Bc5-5グリッドに位置する。平面は径36cmの円形で、確認面からの深さは16cmである。底面は平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。埋土は、黒褐色砂質土の単一層で、遺物は出土していない。

4 遺構外・攪乱出土遺物

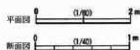
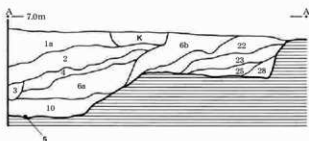
遺構外では、Ⅲa・b層およびⅣ層から近世の遺物が出土している。ただし、前者は近代の遺物も出土しているので、近世の包含層に該当するのはⅣ層だけである。Ⅳ層からは、調査区1・2を合わせて平箱1/2ほどの遺物量が出土している。ただし、その多くが小片で、器形を復元できる遺物は少ない。種別は、陶磁器・土器・瓦である。磁器は、染付の碗・蓋・水滴・急須、青磁の碗が少量出土している。陶器は、珠洲焼の片口鉢・甕のほか、唐津産の皿や越前焼の播鉢、徳利などが出土している。土器は出土量が最も多い。かわらけが主体であるが、小片で磨滅しているため器形が不明なものも多くみられた。なお、わずかに古代の須恵器も混じる。瓦の出土はごくわずかで、黒瓦のほかに、赤瓦が1点出土しただけである。

ここでは、Ⅳ層からの出土遺物に、一部攪乱出土のものも加えて、11点を図化した。1～8は調査区1から、9～11は調査区2からの出土である。

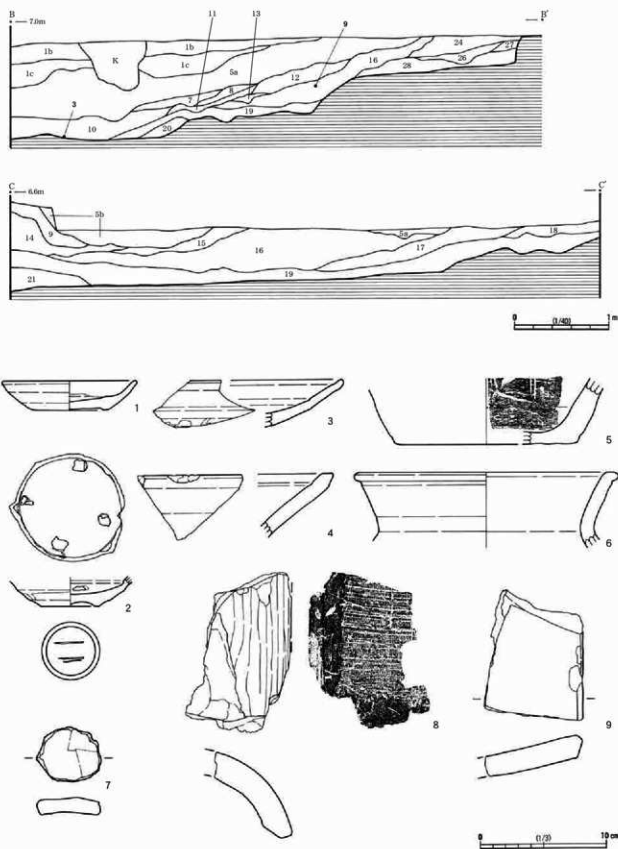


3号堀

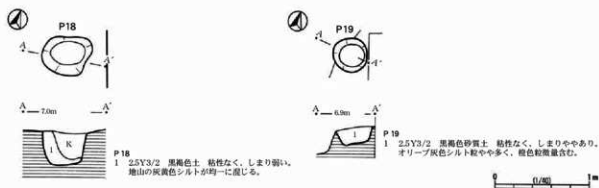
- 1a 10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりややあり。灰オリーブ色シルト粒や多く、炭化物・礫少量含む。
- 1b 7.5Y2/1 黒色土 粘性ややあり、しまりあり。灰色細砂が横断状に少量混じる。炭化物や多く、オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
- 1c 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性・しまりややあり。オリーブ灰色シルトブロックや多く、炭化物・礫少量含む。
- 2 5Y6/2 灰オリーブ色細砂・シルト 粘性なく、しまり弱い。黒褐色粘質土や多く含む。
- 3 10Y5/1 灰色砂 粘性・しまりなし。
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり、しまりややあり。炭化物微量含む。
- 5a N3 暗灰色粘質土 粘性・しまりややあり。オリーブ灰色シルトブロック極少量。黒色土ブロック・炭化物少量含む。色調は青味が強い。
- 5b N3 暗灰色砂質土 粘性・しまりややあり。断面面に沿って灰色砂・未分解植物や多く混ざる。礫やや多く、炭化物少量含む。
- 6a N3 暗灰色シルト 粘性なく、しまり弱い。灰色細砂少量含む。色調は青味が強い。
- 6b 5Y4/1 灰色シルト 粘性なく、しまり弱い。オリーブ灰色シルト粒・礫少量含む。
- 7 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト 粘性ややあり、しまり弱い。礫少量含む。
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性ややあり、しまり弱い。礫・未分解植物を微量含む。
- 9 N3 暗灰色粘質土 粘性あり、しまりややあり。オリーブ灰色シルト粒少量。炭化物微量含む。
- 10 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 粘性あり、しまり弱い。オリーブ灰色シルト多量。未分解植物や多く含む。
- 11 5Y4/1 灰色砂 粘性・しまりなし。オリーブ灰色シルト少量含む。
- 12 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト 粘性ややあり、しまりやや弱い。黒色シルトが横断状にやや多く混じる。灰色細砂少量含む。
- 13 5Y6/1 灰色砂 粘性・しまりなし。オリーブ灰色シルト・礫やや多く含む。
- 14 N4 灰色シルト 粘性・しまりややあり。礫少量。オリーブ灰色シルト粒微量含む。
- 15 N2 黒色土 粘性・しまりややあり。炭化物や多く、礫少量。オリーブ灰色シルト粒微量含む。
- 16 N3 暗灰色土 粘性あり、しまりややあり。暗オリーブ灰色シルトや多く、炭化物少量含む。色調は5a層より暗く、24層より青味が強い。
- 17 N4 灰色細砂 粘性なく、しまりややあり。19層が底状に多く混じる。オリーブ灰色シルトブロックや多く含む。
- 18 N4 灰色土 粘性・しまりややあり。オリーブ灰色シルトブロック・灰色砂少量。炭化物微量含む。
- 19 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 粘性あり、しまりややあり。未分解植物多量。オリーブ灰色シルト少量含む。
- 20 5Y4/1 灰色砂 粘性なし、しまりややあり。未分解植物や多く、オリーブ灰色シルト少量含む。
- 21 N5 灰色砂 粘性・しまりややあり。19層が底状にやや多く混じる。
- 22 10YR3/1 黒褐色砂質土 粘性・しまりややあり。
- 23 N3 暗灰色シルト 粘性弱く、しまりややあり。灰色細砂が横断状にやや多く混じる。オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
- 24 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性・しまりややあり。灰オリーブシルト粒・礫少量。炭化物微量含む。
- 25 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 粘性あり、しまりややあり。オリーブ灰色シルトブロック多量。灰色細砂や多く含む。
- 26 N1.5 黒色粘質土(28層)と5Y6/1灰色シルトの混合層 粘性・しまりややあり。灰色細砂を部分的に少量含む。
- 27 5Y2/1 黒色土 粘性・しまりややあり。オリーブ灰色シルト粒や多く含む。
- 28 N1.5 黒色粘質土 粘性あり、しまりややあり。灰色細砂が堀肩付近に横断状に少量混じる。



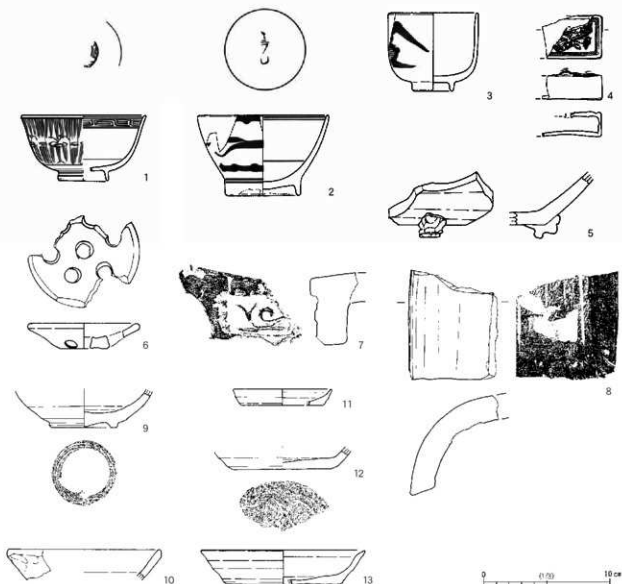
第19図 3号堀実測図(1)



第20図 3号堀実測図(2)と出土遺物



第21図 18・19号小ピット実測図

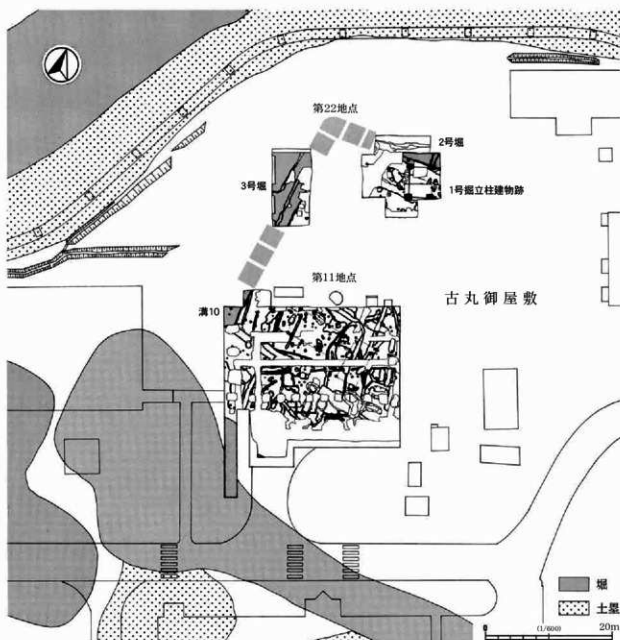


第22図 遺構外・攪乱出土遺物

第Ⅲ章 まとめ

今回調査した第22地点は、新発田城を描いた現存する絵図面によると、二ノ丸の「古丸」と呼ばれる区画に含まれる。検出した遺構は、堀3本、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、溝5条、土坑6基、小ピット19基で、いずれも近世の所産である。時期は19世紀代(幕末期を含む)と考えられる。

「古丸」は、天正年間に活躍した戦国武将、新発田重家の居館があったと伝えられている場所で、過去の調査(第8～11地点)でも、中世の遺構を多数検出している(鶴巻ほか1997・2001)。しかし、今回の調査では当該期の遺構は検出されなかった。過去の周辺地点の調査結果から考えて、もともと中世の遺跡の範囲外であるとい



第23図 第11・22地点と古丸御屋敷



『城下家中屋敷割図』天保年間(1830年)以前



『一歩一問歩誌総絵図』天保11(1840)年頃

第24図 新発田城の絵図

うよりは、近世新発田城を築く際に大きく土地の改変がなされ、中世の遺構が失われたために検出されなかったと推測される。

今回の調査で検出した堀(1～3号)のうち、2号堀と3号堀は、それぞれの延長したラインが直交する位置関係にあると推定される。また、2号堀は、1号堀によってかなり狭されているため正確な形態は不明であるが、確認面から底面までの深さをみた場合、3号堀の一段目のテラス面に対応する可能性が高い。このことから、両者は南北から東西方向にL字状に折れ曲がる同一の堀である可能性が考えられる。さらに、本調査地点から13mほど南に位置する第11地点からは、3号堀の延長線上に溝(溝10)が見つかった。掘り込みが浅いことから溝と判断されているが、2号堀と同様、堀の一段目のテラス面とも考えられる。帰属年代については、出土遺物から15世紀後半と報告されているが、遺構は一部しか検出されておらず、その年代はかならずしも確定的とはいえない。よって、ここでは3号堀と同一の堀である可能性を指摘しておきたい。

最後に、今回の調査地点を絵図面と照らし合わせてみたい(第23・24図)。「城下家中屋敷割図」(天保年間以前:1830年以前)と「一歩一問歩誌総絵図」(天保11年頃:1840年頃)によれば、調査地点は「古丸御屋敷(舖)」地内に該当している。両絵図は、「古丸」を比較的詳しく描いているが、今回検出した堀は、どちらにも描かれていない。さらに、調査では礎盤石を持つ掘立柱建物跡を1棟検出しているが、その位置は、絵図に描かれている建物の位置とは異なっている。絵図が必ずしも正確に描かれているとは限らないが、堀のような規模の大きな造営物を省略するとは考えにくい。よって、今回検出した堀や掘立柱建物跡は、両絵図が作成された後に造られたものと考えたい。絵図の作成年代(19世紀前半以前)と遺構の帰属年代(19世紀後半)にも時間差があり、矛盾はないといえよう。しかし『明治初年の新発田藩家中屋敷割図』にも、今回検出した堀や建物は描かれていないことから、比較的短期間のうちにどちらも破棄された可能性が考えられる。

今回の調査では、絵図に描かれていない堀や建物跡などを検出することができた。しかし、その詳細については、推測を重ねたような分析となってしまう、第22地点の該当する「古丸御屋敷」の様相や性格を明らかにすることはできなかった。今後、周辺での調査が進み、資料が蓄積された上で、改めて検討する必要がある。

引用・参考文献

- 伊藤喜代子ほか 2008『新発田城跡 発掘調査報告書 V (第19地点)』 新発田市教育委員会
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 I』 江戸出土陶磁土器研究グループ
- 大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様』 理工学社
- 大橋康二・吉永陽三 2004『古伊万里の見方』シリーズ1 種類 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二・鈴木由紀夫 2005『古伊万里の見方』シリーズ2 成形 佐賀県立九州陶磁文化館
- 小山正忠・竹原秀雄 1967『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 九州近世陶磁学会 2009『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』東海・北陸・甲信越編
- 国土地理院 1993『1:25,000 土地条件図 新発田』
- 小林 克 1991「火もらいについて」『江戸在地系土器の研究』I 江戸在地系土器研究会
- 佐々木彰 1996『汐留遺跡の焙烙の変遷』『汐留遺跡』(第3分冊) 汐留地区遺跡調査会
- 新発田市教育委員会編 1998『城下町新発田400年のあゆみ』 新発田市
- 新発田市史編纂委員会編 1980『新発田市史』上巻 新発田市
- 鈴木 康 2008『新発田藩』シリーズ藩物語 現代書館
- 染井遺跡(三菱重工業染井アパート地区)発掘調査団編 2001『染井VI』 豊島区教育委員会
- 田口昭二 1983『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニュー・サイエンス社
- 田中耕作 1987『新発田城跡発掘調査報告書(I～Ⅲ区)』 新発田市教育委員会
- 坪井利弘 1976『日本の瓦屋根』 理工学社
- 鶴巻康志ほか 1997『新発田城跡 発掘調査報告書 II (第7～10地点)』 新発田市教育委員会
- 鶴巻康志ほか 2001『新発田城跡 発掘調査報告書 III (第11・12地点)』 新発田市教育委員会
- 鶴巻康志 2004『新発田城跡 発掘調査報告書 IV (第16地点)』 新発田市教育委員会
- 東京大学埋蔵文化財調査室編 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』東京大学庶務部庶務課広報室
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 堀内秀樹ほか 1993『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊
東京大学埋蔵文化財調査室
- 加藤 晃 1989「江戸時代の瓦における江戸式の展開」『史学研究集録』第14号 國學院大學日本史学専攻大学院会
- 金子 智 1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒椀瓦の地方色」『古代』第101号 早稲田大学考古学会
- 吉田浩明ほか 2007『東池袋II』 玉川文化財研究所
- 渡邊美穂子・吉川純子 2009『新発田城跡 発掘調査報告書 VI (第20地点)』 新発田市教育委員会

遺物観察表

出土地点	番号	種別	計測値	技法／文様／その他	遺存率	推定生産地	備考
1号竪立柱建物 (第5図)	1	磁器 碗	口径：(10.8) 底径：4.8 器高：5.7	ロクロ成形／染付、疊付無軸。内外面「罌目文」、見込み「菊花文」／断面に漆付着	1/4	肥前	漆継あり。
	1	磁器 碗	口径：(8.1) 底径：(3.8) 器高：4.3	ロクロ成形／染付、疊付無軸。外面文様。見込み一重圓線と文様	1/2		5層出土。
1号竪穴状遺構 (第6図)	2	磁器 碗	口径：(7.9) 底径：3.2 器高：4.5	ロクロ成形／染付、疊付無軸。外面「草花文」／断面に漆付着	2/3	肥前	漆継あり。 5層出土。
	3	磁器 碗	口径：(10.7) 底径：(4.1) 器高：6.2	ロクロ成形／染付、疊付無軸。外面「花様文」、口縁内面「雷文」、見込み一重圓線と文様	1/3	肥前	5層出土。
	4	磁器 鉢	口径：(13.0) 底径：(9.4) 器高：5.6	ロクロ成形、蛇の目型高台／白磁	1/4	肥前	5層出土。
	5	磁器 碗	口径：(9.8) 底径：4.0 器高：4.9	ロクロ成形／染付、疊付無軸。内外面「罌目文」、高台内文様。見込み「菊花文」、内外面に貫入	1/3	肥前	1・5層出土。
	6	磁器 碗	口径：(11.8) 底径：(4.6) 器高：(6.9)	ロクロ成形／染付、疊付無軸。口縁内面四方棒文。見込み二重圓線／内面・断面に漆付着	1/3	肥前	漆容器に転用。 漆継あり。 5層出土。
	7	磁器 水漬	長さ：(4.3) 幅：(3.5) 器高：3.7	型押し成形／色絵／絵具は黒褐色・淡褐色化（僅かに緑遺存）		肥前	5層出土。
	8	陶器 鉢	口径：13.7 器高：(18.1)	ロクロ成形／疊付無軸。外面鉄軸・白泥・絵具（黄・緑）、高台内鉄軸。内面鉄軸・自然釉	体部1/6	肥前唐津	1号掘立P2出土の破片と接合。 5層出土。
	9	陶器 甕	口径：(9.1) 底径：3.1 器高：2.3	ロクロ成形、底部回転ヘラ切り、亀形摺み貼付け／外面無軸、内面灰釉	1/2		5層出土。
(第7図)	10	陶器 台付燗鍋	口径：4.8 器高：(1.8)	ロクロ成形、底部回転糸切り（右）／色調：黄褐色		台部	
	11	陶製品 焼台	上面径：8.6 器高：2.4	ロクロ成形、上面回転糸切り（右）／無軸	2/3		竈道具。 1層出土。 5層出土。
	12	瓦器 火鉢		ロクロ成形、獅子頭形有孔把手貼付け／外面スタンプ「菊花文」／色調：黒褐色。焼成：良好	胴部破片		
	13	土器 焙烙	器高：(5.6)	ロクロ成形、体部下半回転ヘラズリ、焼成前穿孔／色調：淡褐色・外面黒色処理。焼成：良好	口縁部破片		5層出土。
	14	土器 提灯	器高：(4.4)	板作り成形、獅子頭形足貼付け（遺存1）／色調：明褐色。焼成：良好	底部破片		5層出土。
	15	土器 火鉢	口径：(22.7) 器高：(10.7)	板作り成形か、足貼付け（遺存1）／色調：橙褐色。焼成：良好。底部内面煤付着	底部1/4		1・5層出土。
	16	土器 目皿	上面径：7.8 器高：(1.3)	型押し成形、焼成前穿孔／底面布目痕／色調：明褐色・上面被熱により灰色。焼成：良好。胎土：長石や多	1/4		5層出土。
	17	石製品 硯	長さ：(9.7) 幅：(2.5) 厚さ：2.5	材質：粘板岩。重量60.9g			5層出土。
	18	石製品 砥石	長さ：(6.7) 幅：5.1 厚さ：0.8	材質：頁岩。重量42.7g			5層出土。
	19	瓦 平瓦 (赤瓦)		板作り／施釉	破片		5層出土。
	20	瓦 軒丸瓦 (黒瓦)	瓦当径：14.4	板作り・型当て・型巻き成形。カキヤブリ痕あり／瓦当：三つ巴文左巻き圓線なし。珠文16	瓦当部 完形		5層出土。
	21	瓦 丸瓦 (黒瓦)		板作り・型巻き成形	破片		5層出土。
2号土坑 (第8図)	1	磁器 碗	口径：7.2 底径：3.4 器高：4.5	ロクロ成形／色絵。疊付無軸。見込み「龍文」（剥落により絵具不明）	3/4		1・2・4層出土。
	2	磁器 餌入れ	口径：4.8 底径：4.1 器高：2.5	ロクロ成形／染付。底面無軸。外面「菊花文」か	1/2		3層出土。

出土地点	番号	種別	計測値	技法／文様／その他	遺存率	推定生産地	備考
2号土坑 (第8図)	3	磁器 蓋	口径：9.7 握み径：3.7 器高：2.9	ロクロ成形／染付、墨付無軸、外面文様、高台内銘一重角杵「青」、口縁内面二重圓線・「雷文」、見込み「宝珠文」	3/4		3層出土。
	4	陶器 碗	口径：〈9.2〉 底径：(5.8) 器高：6.7	ロクロ成形、体部外面押注痕／内外面鉄軸、墨付無軸	1/2		
	5	陶器 急須	口径：6.0 底径：5.6 器高：8.9	ロクロ成形／外面鉄軸・灰軸、内面無軸／把手に刻印「陶政一」	2/3 注口欠損		
	6	陶器 土瓶	口径：6.9 器高：〈1.3〉	ロクロ成形／内面鉄軸／底部外面に墨書「フナカ」、体部下半・断面に漆付着	底部2/3		漆継あり。 3層出土。
	7	陶器 蓋	長辺：4.3 短辺：4.2 器高：1.8	手づくね成形、蓮形？柄み貼付け／上面鉄軸	完形		N.9急須の蓋。 2層出土。
(第9図)	8	陶器 蓋	口径：(11.2) 底径：(5.6) 器高：2.7	ロクロ成形、体部下半・底部回転ヘラケズリ／外面無軸、内面鉄軸	1/3		2層出土。
	9	陶器 蓋	口径：(16.9) 器高：〈3.1〉	ロクロ成形／外面鉄軸・イチン・トビカシナ、内面鉄軸	1/8		3層出土。
	10	陶器 鉢	口径：(12.0) 器高：〈4.6〉	ロクロ成形、高台回転ヘラケズリ／内外面鉄軸、高台無軸	底部1/4	肥前	
	11	陶器 播鉢	口径：25.0 底径：10.2 器高：10.5	ロクロ成形、見込み胎土目(遺存3)／外面・口縁部内面鉄軸、高台・体部内面無軸／播目12本一単位	4/5		1・2・3層出土。
	12	土器 七厘	口径：11.5 器高：17.8	底部板作り後体部輪積み成形、体部内外面ナデ、三足貼付け(遺存2)、焼成前穿孔(4箇所)／口縁部内面に煤付着／色調：淡黄褐色、焼成：良好	4/5		2・3層出土。
	13	土器 目皿	上面径：(11.7) 底径：(11.8) 器高：〈1.4〉	型押し成形、焼成前穿孔／色調：橙褐色、焼成：良好、胎土：長石多量	1/5		
	14	土器 火鉢	口径：(17.1) 底径：9.9 器高：9.8	ロクロ成形、体部下半・高台内回転ヘラケズリ／口縁部敲打痕、体部外面墨書／色調：淡黄橙褐色、焼成：良好	1/2		灰膏しにも使用。 1・2層出土。
	15	土器 塔焼	口径：32.5 器高：〈4.4〉	底部型押し後体部ロクロ成形、焼成前穿孔／底部外面ちぢれ目、内外面煤付着／焼成：良好	体部上半 3/4		
3号土坑 (第10図)	1	瓦器 火鉢	口径：(24.6) 器高：〈15.3〉	ロクロ成形、獅子頭形有孔把手貼付け(遺存2)／胴部外面スタンプ「菊花文」「斜格子文」ほか／色調：黒褐色、焼成：良好	1/3		1層出土。
4号土坑 (第10図)	1	磁器 碗 (広東碗)	口径：(10.3) 底径：5.5 器高：6.6	ロクロ成形／染付、墨付無軸、外面「草文」、見込み二重圓線・「菊花文」、高台内「成化年制」／焼離跡、断面に漆付着	2/3	肥前	焼離と漆継あり。 2層出土。
	2	磁器 碗	口径：6.9 底径：3.3 器高：4.9	ロクロ成形／染付、墨付無軸、外面「唐草文」「由文」、口縁部内面二重圓線	2/3	肥前	2層出土。
	3	磁器 碗 (端反碗)	口径：(8.2) 底径：(3.4) 器高：4.6	ロクロ成形／染付、墨付無軸、外面「水面に水鳥文」「草文」	1/4	瀬戸・美濃	1層出土。
	4	磁器 燗徳利	口径：(5.6) 器高：〈4.6〉	ロクロ成形／外面透明釉、底部・内面無軸	1/5		1層出土。
	5	陶器 燈火受付皿	口径：10.4 底径：3.6 器高：2.0	ロクロ成形、体部下端・底部回転ヘラケズリ／口縁部外面鉄軸・体部下半無軸、内面鉄軸	4/5	信楽	2層出土。
3号小ピット (第11図)	1	陶器 植木鉢	口径：20.1 底径：9.1 器高：14.1	ロクロ成形、底部焼成前穿孔、高台回転ヘラケズリ・切込み(遺存2)／外面・口縁部内面鉄軸、高台・体部内面無軸	1/2		1層出土。
1号壺 (第13図)	1	磁器 碗	口径：(6.2) 底径：〈2.1〉 器高：〈1.4〉	ロクロ成形／青磁、高台内輪状に軸削り取り	底部1/4		1層出土。
	2	磁器 皿	口径：3.6 器高：〈1.4〉	ロクロ成形／陶胎白磁、体部下端・高台無軸、高台内墨書	底部1/2		1層出土。
	3	陶器 播鉢		ロクロ成形／播目7本一単位、色調：灰白色、焼成：良好	体部破片		3層出土。
	4	陶器 播鉢		ロクロ成形／外面自然釉／播目10本一単位、色調：暗赤褐色、焼成：良好、胎土：淡黄橙褐色で長石多量	体部破片	越前	1層出土。
	5	陶器 甕		輪積み成形、外面タタキ／色調：灰色、焼成：良好、胎土：礫少量	胴部破片	珠洲	1層出土。
	6	陶器 甕		輪積み成形、外面タタキ／色調：灰色、焼成：堅緻、胎土：白色針状物多量	胴部破片	珠洲	3層出土。

出土地点	番号	種別	計測値	技法/文様/その他	遺存率	推定生産地	備考
1号堀 (第13図)	7	陶器 控鉢	底径: (10.0) 器高: <3.0>	ロクロ成形/色調: 灰色。焼成: 良好	底部1/4	珠洲	3層出土。
	8	土器 かわらけ	底径: (8.8) 器高: <2.1>	ロクロ成形。底部回転へうり切り/色調: 淡黄褐色。焼成: やや軟。胎土: 金雲母微量	底部1/4		1層出土。
2号溝 (第14図) 5号土坑 (第15図)	1	陶器 小壺	口径: (7.0) 器高: <2.5>	ロクロ成形/外面灰釉流し掛け	口縁部 1/8		
	1	磁器 碗	口径: (7.1) 器高: <4.0>	ロクロ成形/染付。外面「波格子文」, 口縁部内面二重圓線	1/3		1層出土。
	2	磁器 碗 (広東碗)	口径: (10.6) 底径: 4.9 器高: 7.0	ロクロ成形/染付。疊付無釉。外面「草花文」。見込み一重圓線・文様/高台内砂付着	2/3	肥前	皿a層出土。
	3	磁器 皿	底径: (7.6) 器高: <1.9>	ロクロ成形/染付。疊付無釉。内面「草花文」か。見込み二重圓線	底部1/4	肥前	1層出土。
	4	陶器 碗	口径: (5.6) 器高: <3.9>	ロクロ成形。見込み砂目/外面灰釉。体部下半・高台・内面無釉	底部1/4	肥前唐津	1層出土。
	5	陶器 蓋	口径: 5.5 器高: <1.4>	ロクロ成形。焼成面穿孔/外面白泥。鉄絵・緑釉。内面無釉	摘みのみ 欠損		1層出土。
	6	陶器 蓋	口径: 6.6 受部径: 5.0 器高: 3.1	ロクロ成形。摘み貼付け。穿孔なし/外面白泥。受部・内面無釉	完形		1層出土。
	7	陶器 台付茶燗	口径: (4.6) 器高: <2.0>	ロクロ成形/胎釉	口縁部 1/3		1層出土。
	8	陶器 手焙り (ボウズ)	底径: 17.6 器高: <9.4>	ロクロ成形。高台切込み(3箇所)/外面灰釉。高台内・内面無釉/窓部蔽打痕	1/2		灰落しにも使用。 2層出土。
(第16図)	9	土製品 人形 (網乗り童子)	高さ: <11.2> 幅: 9.7 厚さ: <2.8>	型押し成形	1/3		1層出土。
	10	土器 七厘	口径: (19.4) 器高: <7.5>	ロクロ成形。足貼付け(遺存1)。焼成前穿孔(遺存1)/口縁部内面煤付着/色調: 黄褐色。焼成: 良好。胎土: 密	口縁部 1/4		1層出土。
	11	土器 壺	口径: (21.9) 底径: 11.2 器高: 20.5	ロクロ成形。胴部下半・底部回転へうり/色調: 淡褐色。焼成: 良好。胎土: 密で赤色粒子少量	4/5		1層出土。
	12	木製品 下駄	長さ: 16.0 幅: 6.3 高さ: 3.0	前歯削り出し・後歯差し込み。ホゾ穴なし/全面に黒色漆	後歯のみ 欠損		1層出土。
	13	木製品 下駄	長さ: 16.0 幅: 6.4 高さ: 3.2	前歯削り出し・後歯差し込み。ホゾ穴なし/全面に黒色漆	後歯のみ 欠損		1層出土。
	14	木製品 馬形	長さ: 32.9 幅: 8.5 高さ: 17.5	削り出し。頸部切り込み・腹部穴4箇所(遺存3)・尻部穴1箇所	ほぼ完形		1層出土。
6号土坑 (第16図)	1	土器 かわらけ	口径: (7.3) 底径: (5.6) 器高: 1.3	ロクロ成形。底部回転糸切り。内外面ナデ/色調: 淡黄褐色。焼成: 良好。胎土: 金雲母少量	1/4		1層出土。
	2	土器 鉢	口径: <4.8>	ロクロ成形。内外面ナデ/色調: 黄褐色。焼成: 良好。胎土: 石英・長石・礫多量	口縁部 破片		古代。 1層出土。
15号小ビット (第17図)	1	土器 かわらけ	底径: (9.4) 器高: <1.8>	ロクロ成形。底部回転へうり切り/色調: 淡黄褐色。焼成: 不良。胎土: 赤色粒子やや多	底部1/8		1層出土。
3号堀 (第21図)	1	陶器 皿 (内壳皿)	口径: (10.6) 底径: (5.7) 器高: 2.4	ロクロ成形。削り出し高台/内外面灰釉。高台内・底部内面無釉	1/4	瀬戸・美濃	大塚3期。 5a層出土。
	2	陶器 皿	底径: 4.5 器高: <2.3>	ロクロ成形/内外面灰釉。高台内無釉/高台内縁刻「二」か。見込み目痕(4箇所)	1/2	肥前唐津	1a層出土。
	3	陶器 皿	器高: <3.7>	ロクロ成形/内外面灰釉	口縁部 破片	肥前唐津	10層出土。
	4	陶器 権鉢	器高: <5.1>	ロクロ成形/無釉/色調: 褐色。焼成: 良好。胎土: 長石多量	口縁部 破片		5a層出土。
	5	陶器 権鉢	底部: (14.4) 器高: <5.2>	ロクロ成形/無釉/色調: 黒褐色。焼成: 良好。胎土: 淡黄褐色で長石少量	底部1/5	越前	10層出土。
	6	陶器 甕	口径: (20.8) 器高: <6.0>	ロクロ成形/無釉/色調: 赤褐色。焼成: 堅緻。胎土: 長石多量	口縁部 1/8	肥前唐津	5b層出土。
	7	陶製品 陶製円盤	長径: 5.1 短径: 4.2 厚さ: 1.2	重量37.2g/陶器甕を打ち割って加工。研磨痕なし。	完形		5a層出土。

出土地点	番号	種別	計測値	技法／文様／その他	遺存率	推定生産地	備考
3号堀 (第20図)	8	瓦 丸瓦 (黒瓦)	体部: <12.0>	板作り・型巻き成形／色調: 黒褐色	体部破片		5a層出土。
	9	瓦 平瓦 (黒瓦)	長さ: <9.7> 厚さ: 1.7	板作り成形／色調: 灰白色	破片		16層出土。
遺構外・攪乱 (第22図)	1	磁器 碗	口径: (9.9) 底径: (4.0) 器高: 5.2	ロクロ成形／染付, 量付無軸, 外面 「雨降り文」, 口縁部内面二重圓縁・ 「雷文」, 見込み一重圓縁・文様	1/6	瀬戸・美濃	Ec1-2グリッド。 IV層出土。
	2	磁器 碗 (広東碗)	口径: (10.4) 底径: 5.9 器高: 6.4	ロクロ成形／染付, 量付無軸, 外面 「草花文」, 口縁部内面二重圓縁, 見 込み一重圓縁・文様／高台内砂付着	1/2	肥前	Eb1-4グリッド。 IV層出土。
	3	磁器 碗	口径: (7.2) 底径: 3.2 器高: 6.2	ロクロ成形／染付, 量付無軸, 外面文 様	2/3	肥前か	Eb1-4グリッド。 IV層出土。
	4	磁器 水漬	長さ: <4.7> 幅: 3.5 器高: 2.3	型押し成形／染付, 底部無軸, 底部内 外面布目痕	2/3	肥前	Eb1-4グリッド。 IV層出土。
	5	陶器 深皿 (折縁深皿)	器高: <5.2>	ロクロ成形, 足貼付け／内面自然軸／ 色調: 黄褐色, 焼成: 堅緻, 胎土: 密	底部破片	瀬戸・美濃	Ec1-2グリッド。 IV層出土。
	6	土器 目皿	口径: 8.9 底径: 3.6 器高: 2.0	ロクロ成形, 底部回転ヘラ切り, 焼成 前穿孔／色調: 橙褐色, 焼成: 良好, 胎土: 赤色・白色粒子少量	1/2		Ec1-2グリッド。 IV層出土。
	7	瓦 軒平瓦 (黒瓦)	瓦当径: (5.3)	板作り・型当て・型巻き成形／瓦当 「均整唐草文」／色調: 灰白色	瓦当部 1/3		所謂「太坂式」。 Db3-4グリッド。 IV層出土。
	8	瓦 丸瓦 (黒瓦)	体部: <8.7> 厚さ: 2.0	板作り・型巻き成形, 外面ヘラケズリ ／色調: 黒色	体部破片		Ec1-2グリッド。 IV層出土。
	9	陶器 碗	底径: 5.5 器高: <3.1>	ロクロ成形, 体部下端回転ヘラケズリ, 底部回転系切り, 削り出し高台／外面 一部自然軸, 内面灰軸／高台内砂付着	1/3	肥前唐津	調査区2。 攪乱出土。
	10	土器 かわらけ	口径: (12.2) 器高: <2.4>	手づくね成形, 外面押圧痕, 内面ナデ ／色調: 明橙褐色, 焼成: 良好, 胎土: 密	口縁部 1/5		Bb4-5グリッド。 IV層出土。
	11	土器 かわらけ	口径: (7.8) 底径: (6.4) 器高: 1.3	ロクロ成形／色調: 黄橙褐色, 焼成: 良好, 胎土: 石英少量	1/8		Cb1-5グリッド。 IV層出土。
	12	土器 かわらけ	底径: (7.8) 器高: <1.8>	ロクロ成形, 体部下端回転ヘラケズ リ, 底部回転系切り(右), 内面煤付 着, 色調: 黄橙褐色, 焼成: 良好, 胎 土: 赤色粒子やや多	底部1/3		Bc5-3グリッド。 IV層出土。
	13	土器 かわらけ	口径: (13.0) 底径: (9.4) 器高: 2.7	ロクロ成形, 内外面ナデ／色調: 淡橙 褐色, 焼成: 良好, 胎土: 石英少量	1/3		Cc1-2グリッド。 攪乱出土。



1・2号堀 完掘（西から）



3号堀 完掘（北から）

図版 2 調査区 1-IV層、1号掘立柱建物跡、1号竪穴状遺構



調査区 1-IV層 完掘（北西から）



1号掘立柱建物跡 完掘（北西から）



1号掘立柱建物跡-P1 完掘（北から）



1号掘立柱建物跡-P2 完掘（南から）



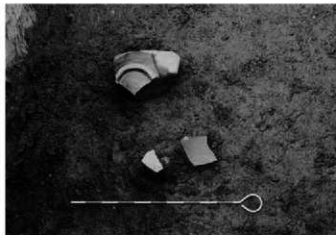
1号掘立柱建物跡-P3 完掘（南から）



1号掘立柱建物跡-P4 完掘（南から）



1号竪穴状遺構 完掘（北から）



1号竪穴状遺構 遺物出土状況（南西から）



2号土坑 土層断面 (西から)



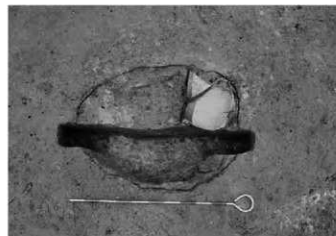
2号土坑 遺物出土状況 (西から)



3号土坑 完掘 (西から)



4号土坑 土層断面 (西から)



3号小ピット 遺物出土状況 (西から)



調査区1 作業風景 (西から)



調査区1-V層 完掘 (北西から)



1・2号堀 土層断面 (南東から)

図版 4 1・2・4号溝、5・6号土坑、調査区2、3号堀、調査区2作業風景



1・2号溝 完掘 (西から)



4号溝 完掘 (南から)



5号土坑 完掘 (南東から)



6号土坑 完掘 (西から)



調査区2 完掘 (南東から)



3号堀 土層断面(1) (北から)



3号堀 土層断面(2) (南東から)



調査区2 作業風景 (北西から)



図1-1



図1-2



図1-3



図1-4



図1-5



図1-6



図1-7



図1-8



図1-9



図1-10

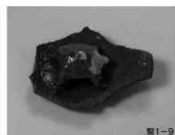


図1-11



図1-12



図1-13

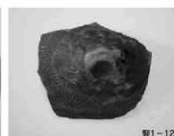


図1-14



図1-15



図1-16



図1-17



図1-18

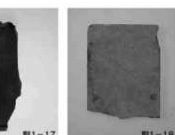


図1-19



図1-20



図1-21



図1-22



図1-23



図1-24



図1-25



図1-26

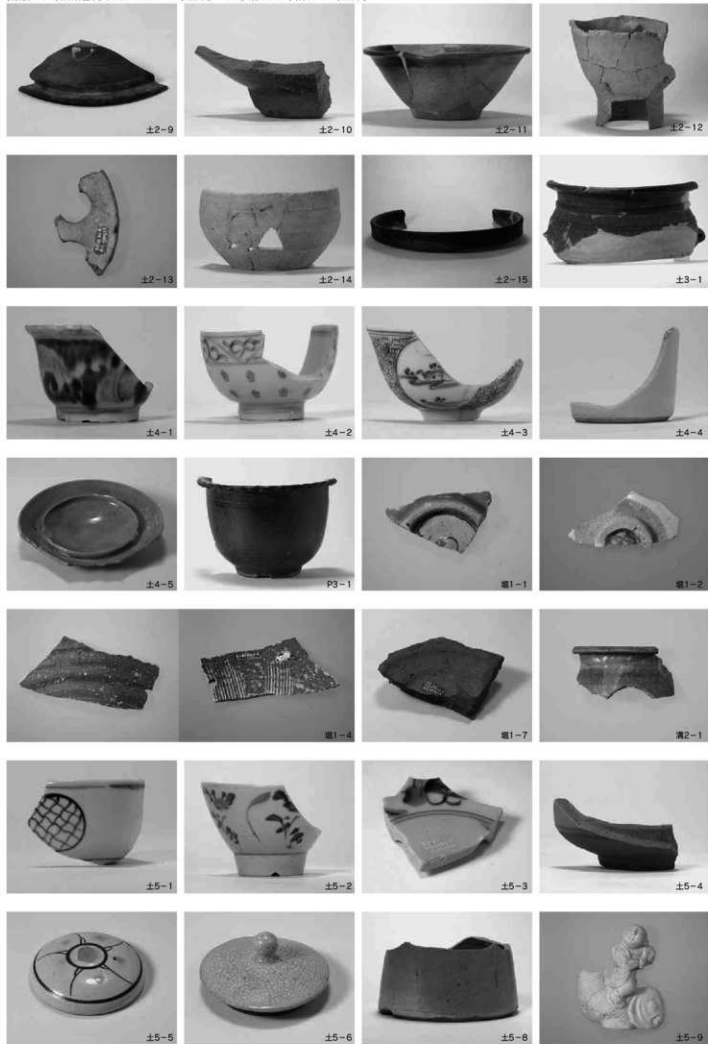


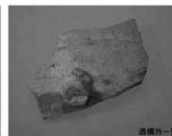
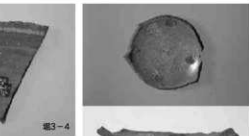
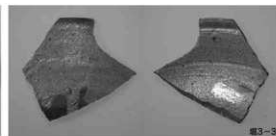
図1-27



図1-28

図版 6 出土遺物(2): 2~4号土坑、1号塚、2号溝、5号土坑





報告書抄録

ふりがな	しばたじょうあと							
書 名	新発田城跡 発掘調査報告書Ⅶ (第22地点)							
副 書 名								
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第40							
編 著 者 名	津田憲司・鶴巻康志							
編 集 機 関	新発田市教育委員会 (教育部 生涯学習課 埋蔵文化財係)							
所 在 地	〒959-2323 新潟県新発田市乙次281番地2 TEL 0254-22-9534							
発行年月日	平成22(2010)年3月16日							
体 裁	A4判 横組1段 本文35頁 写真図版7頁							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新発田城跡 (第22地点)	新発田市大手町6丁目4番16号ほか	15206	92	37° 57′ 27″	139° 19′ 30″	20080605～ 20080731	213.8m ²	陸上自衛隊新発田駐屯地施設建設工事
種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
城 郭	近 世	堀3本 掘立柱建物1棟 竪穴状遺構1基 溝5条 土坑6基		近世陶磁器、瓦器、土器、 瓦、石製品、木製品				
要 約								
調査地点は、現存する絵図によると、新発田城二ノ丸「古丸御屋敷」に該当する。調査の結果、19世紀代(幕末期含む)の遺構・遺物を検出した。中でも、19世紀後半の所産である堀や掘立柱建物跡は、絵図には描かれておらず、当時の「屋敷」地の土地利用を考える上で、新たな資料を提示することができた。								

新発田城跡 発掘調査報告書 VII (第22地点)

発行 平成22 (2010)年3月16日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市大字乙次281番地2
印刷 株式会社 福島印刷